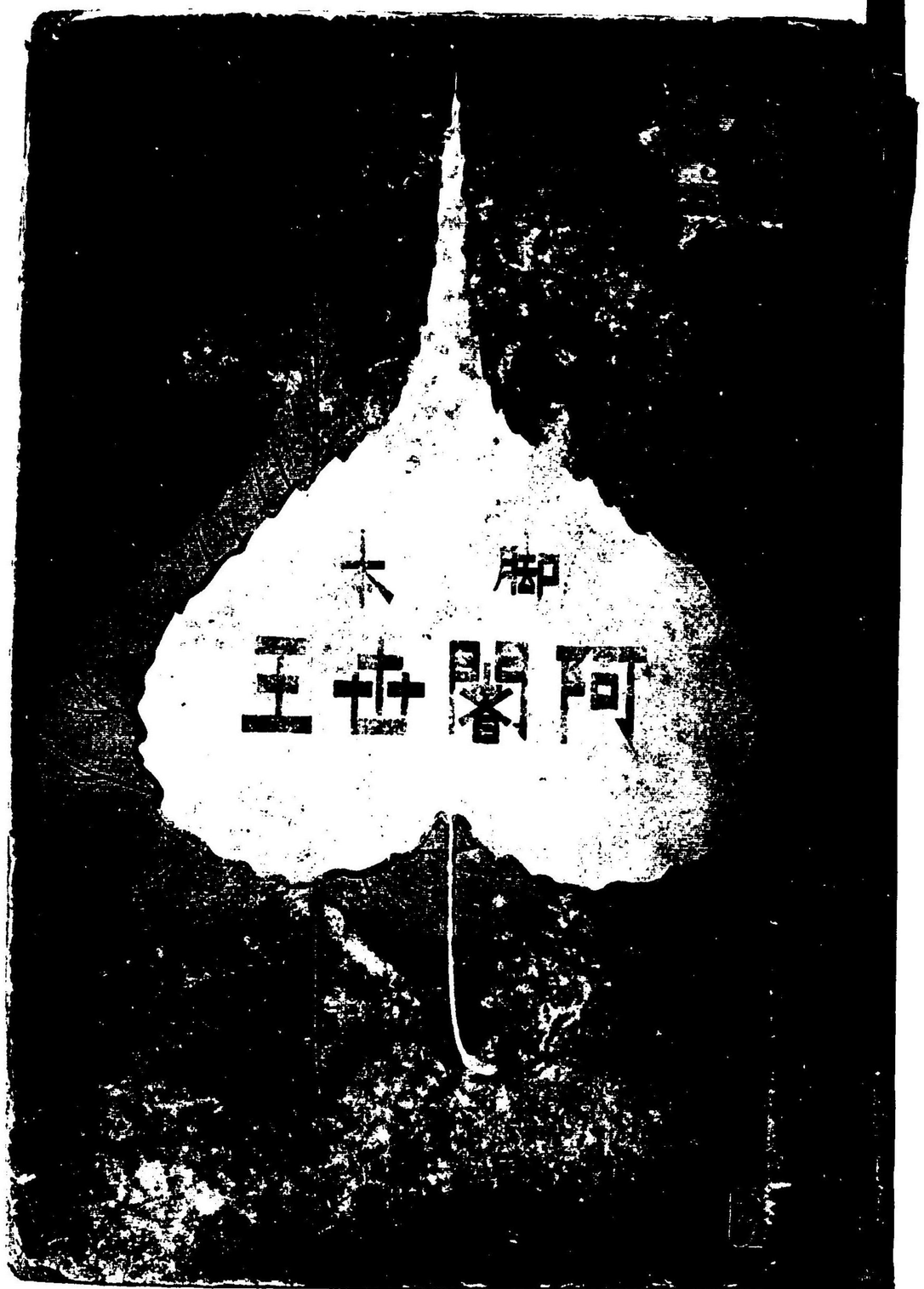


088820-000-3

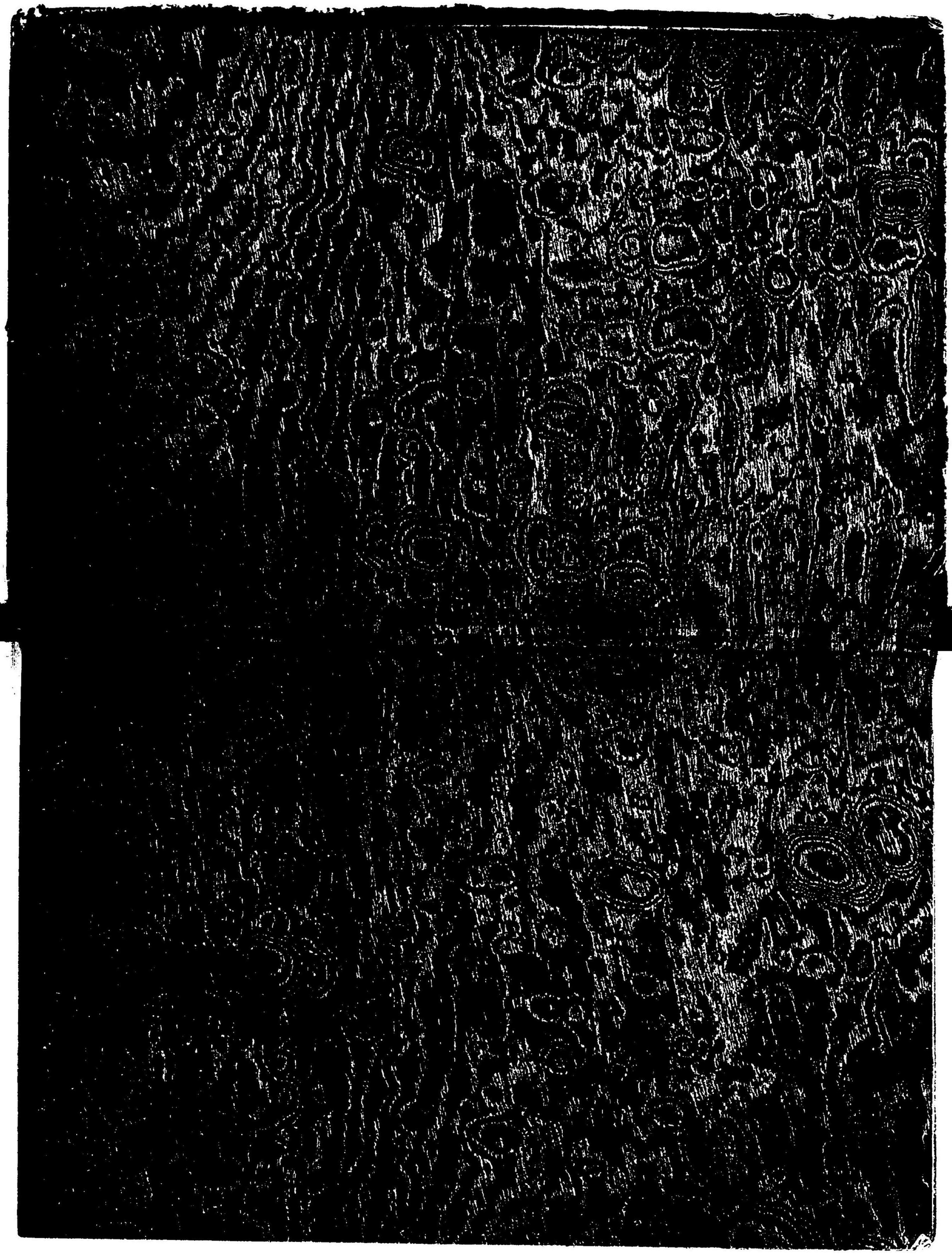
329-35

阿闍世王

野田　四山／著

M43

DBK-0003



329-35

野田四山著

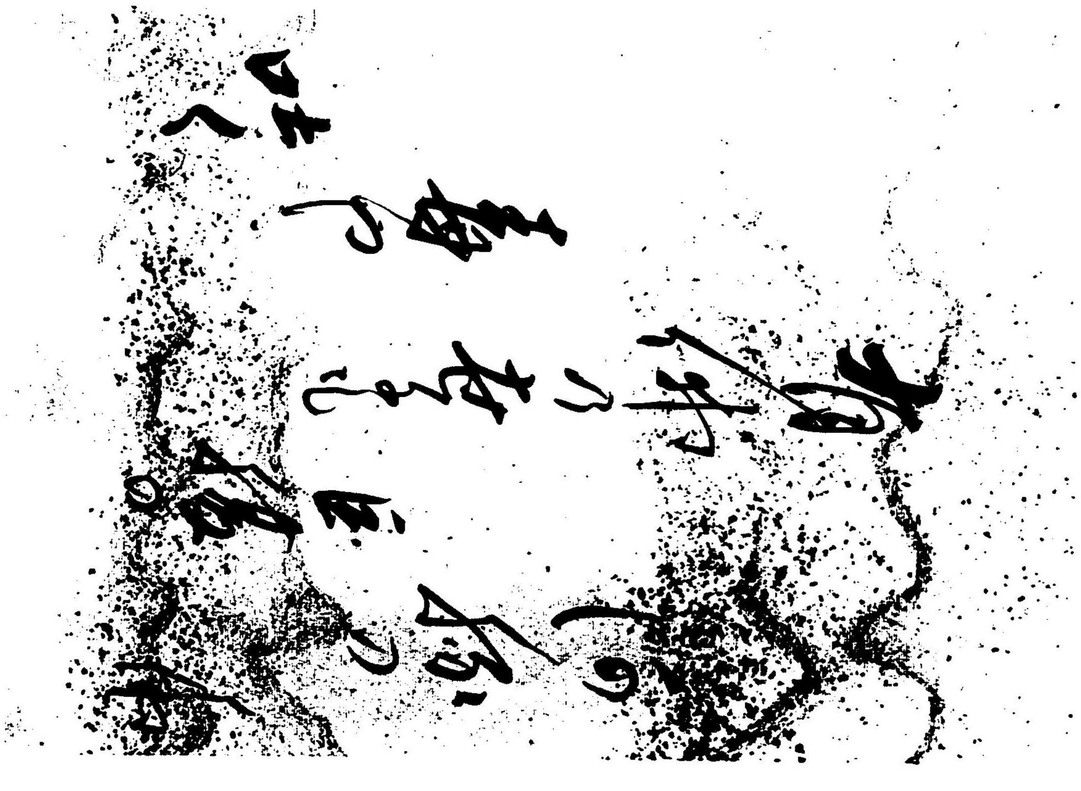
脚本

阿閦世王

全

大阪 前川文榮堂

明治
43. 2. 17
内交



本脚

阿闍世王目次

第一齣　誕生祭

一　舟田舍瑠璃初戀の場……（一）

二　王舍城提婆説法の場……（八）

第二齣　王宮

奥御殿相師珠言の場……（三三）

第三齣　深山の苦

山中仙人殺しの場……（五三）

第四齣　遊獵

一　國内太子悪評の場……（七一）

二　太子猛獣狩の場……（七七）

第五齣　あはせ鏡

一　太子拷問の場……（七九）

第六齣　南殿
二　修道林中提婆惡計の場……(一〇〇)
提婆阿闍世會見の場……(一三一)
第七齣　細業
一　芭蕉林提婆狼籍の場……(一六三)
二　阿闍世父王幽閉の場……(一八六)
第八齣　舊王舍城
一　父王絶食の場……(二〇三)
二　阿闍世母殺しの場……(二一五)
第九齣　病室
阿闍世王苦悶の場……(二五五)
第拾齣　懺悔
阿闍世王扨提河畔悔悟の場……(二七五)

(目次了)

脚本

阿闍世王

野田四山著

第一齣　誕生祭

一。時代　釋尊時代

一。登場人物

王舍城外村娘瑠璃
同女房れ春
提婆婆羅門
同弟子修道者七人
阿難尊者

唄。夜はほの〳〵と明け初めて。かすみの空に旭日影。黄金の城かと疑は

る。曉の都の春げしき。花に埋るゝ王舍城。

曉の鐘にて幕明く。

村娘『清々とした朝の眺望は又格別、今日は三月の十五日、年に一度の誕生祭。早う買うて來ませうわいのう。』

上手より一人の村の娘の愛らしきが手籠を提げて出づ。

女房『たや瑠璃ちやん。』

と行きかゝる。下手より一人の女房、赤兒を負ふて出で來る。

瑠璃『たやれ春殿。』

れ春『大層れ早く、れ使に。』

瑠璃『ハイ、隣村まで參りまする。れ前は何處へ。』

れ春『都まで。』

瑠璃『都に何ぞ。』

れ春『急用が有るのでも何でもないれ前今日は何だと思ふ。』

瑠璃『れ祭ぢやわいのう。』

れ春『そのれ祭に就てぢやわいのう。この間も都の妹から、是非參れと、招に來てくれた時の話に、今度大王さま六十六、そのれ齊宴とやらもある、誕生祭を兼ねての騒ぎ、今日は御城の底が拔けるとの談、私も是から往く處ぢやわいのう。』

瑠璃『たや左樣かいの、そんなら私も直ぐれ跡から。』

れ春『來やんせ〳〵。』

瑠璃『參るわいのう。』

れ春『往くなら早いが宜いわいのう、そんなら一足、ごりや參りませう。』

瑠璃『一寸一と走り、急いで行つて來るわいの。』

と駆け出す娘の袂を引止め、女房獨語。

れ春『たゝ世話の燒ける兒ぢやわいのう、是も功德ぢや。聽かしやうわいの。』

瑠璃『何かいのう。』

れ春『何かいのも無いわいのう。コリヤ曲もない、あのれ前知らぬかいのう。』

瑠璃『何かいのう。』

れ春『れ前の、何時ぞやも夫。』

瑠璃『何かいの。』

お春『それ、それ〳〵。』

瑠璃『……？。』

お春『戀人ぢやわいのう！。』

瑠璃『含きやいのう。』

お春『お前のそれ、ろれ〳〵〳〵戀ひ戀がれて居やる阿難樣。』

瑠璃『知らぬわいのう。』

娘ハット耻かしく、穴にも入りたき科、女房勢に乘ず。

お春『知らぬなら其でよいわいな。』

とツンとする。

お春『ホンに秘す内が罪が無うて、寧そ可愛い、憎らしい。それはろうと思はず話が傍へ外れた。ろのお前、阿難樣とやらがの、今日は都へ御山から、ツィ久々で御使者に參るとの噂。』

瑠璃『ねッ。』

お春『サア其處を聞せたいばッかりに。』

瑠璃『たや左樣かいの。』

瑠璃茫然手籠を落す。女房ポンと脊中を叩いて。

お春『確乎しやいのう。』

瑠璃うろたへて顏を覆ふ。女房手籠を拾ひ取り、つき出す。

お春『瑠璃ちやん此籠は。』

瑠璃『まあ、何うして。』

お春『今お前の手からスル〳〵と落ちて此處にあつたわいな。』

瑠璃『あれ。』

と下手に駈けて入る。お春見送る。氣が付いて、とみかう見。

お春『これはしたり、この手籠私に持たせたなり行ンで了ふた。

瑠璃ちやん！。瑠璃ちやん！。

ホンに處女といふものはしよこども無いもの。戯談いふたら眞に受けて行ンで了ふた。それはそうと此手籠此場に置いて行ンだら盗まりようも知れず、と言つて來やるまで待つて居ては何時の事やら時も遲れる。ハテ困つたわいのう。』

背中の赤兒啼き出す。女房ゆすぶる。

に乳『よち。よち。よち。よい兒ぢや〳〵瑠璃ちやん！。瑠璃ちやん！。』

と大聲にて。

に乳『私は行くわいのう！。』

雲雀啼く。

手籠を下に置き、女房上手へ這入る。

唄。雲雀の聲も蚯田舍。右も左も曼珠沙華。路も隱るゝばかりなり。折から此處を歩ませ玉ふ。容貌魁偉の婆羅門あり。

提婆、行乞の姿にて花道より徐ろに出づ。美美しき衣、金銀珠玉、燦然たり。

唄。御名は提婆とて。魁偉王の太子なり。解脱の憧相いかめしく。二十五條の袈裟。紫金の玉の御足にて。名利の爲に道芝の。踏みしだく痛はしさ。

花道にてジロリ〳〵四邊見廻はし、立ち止まり。

提『われ此むかし大國の太子と生れて御父の、王位を紹ぐべき身なりしが、國

を棄て位を捨て、財寶も、妻も、子も、捨てゝ、出家の苦行。沙門の姿。』

提『われ今王位にあるならば榮華に餘る身の上の、斯く成り果つるも戀の仇。自ら顧みて悲愁すると雖し、天を仰いで大息し。悄き悲達を害めんため、この難行も誰ゆへと、思はぬ日無し、束の間も、うのれ呪はで、置くべきか。通力自在の彼奴が命、覘ゐ敗ねて今日までも、尾けて離れぬこの提婆、大願成就の曉には、奈落の底も厭はぬ覺悟。』

雲雀啼く。

樣子を窺ひつゝ正面近き處にて、籠に目をつけ。

提『人も居らぬに、其處の手籠、コリヤ今の女郎の手籠ぢやなア。』

思案の科。

四邊を窺ひ、小聲になり。

提『われ先ッき、彼方の樹蔭にて窺ひしが、女郎共の物語、確とは聞き取れざりしかど、瑠璃とやら、阿難とやら。

ウム解つたり、美男の阿難。芳紀は二十五、われながら、見惚るゝ彼奴を、ウムこの籠の主。』

唄。天の賜與と手籠の中。取り出す青葉。爪先にて。戀しき瑠璃樣阿難。と爪彫。

錫杖を地に置き、青葉に刻字し、籠に入れる。

唄。四邊うかゝひ懷より。金子百両籠のろこ。葉蔭に秘めて、北叟笑。

科了つて、錫杖突張り狂惡。岸の提婆に返へる。

提『斯くなし置かば、阿難と誤まり今日の使者。王舍城にて彼奴が面、引剝きくれん、心地よやな。ワッハ、、、。が併し此なる金子、人手に渡らば折角の、謀圖も水の泡ならん。樣子は其處の草叢の、祠の蔭にて、ウム、ろうぢや。』

唄。そうぢやと許り出でゝ行く。

幽かに起る奏樂の聲。

提婆上手へ這入る。

黑幕たつ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

正面、宏大なる丹塗の城門、扉開く。門外は春の花盛、樓頭壁上、大小の祝賀翻へる、凡て祭日の體。

花下門側に梵字にて、「施米」の制札、傍らに修道者二人、一人は銅羅を叩き、一人は、上手下手より出で來たる貧民に對し、門内を指し、大聲にて勸めて居る。門より出づるもの、各々施米を携ふ。

出入雜沓の景。

唄。今日こそは。王舍大城。頻婆娑羅王の。御降誕ありし祝日とて。隣國の使臣。祝賀のため。躍をついで登城の樂。嚠喨として遙かに聞ゆる。東城門に施米の札。寄せては返へす群集の波。

入る者必ず、二人に目禮して過ぐ。出づるもの皆走り去り、修道者を顧みるもの一人も無し。二人、頻に呼立てる

甲『あゝ施行、〳〵。』

乙『モシ〳〵只今說法が初まるでムる。』

甲『サア〳〵此處へ。ブッと此處へ。施行は門の内でござる。』

乙『只今、師匠の說敎がござる。』

甲『サア〳〵此門を這入つて右手横町。』

乙『たの〳〵師匠の敎說でござる。聽聞して往きゃれ。』

甲『困らぬ者も來てござる。わ困まりの御方は猶の事。何の遠慮があつたものではござらぬ。サア〳〵わ早く、〳〵。』

乙『有縁の人々は此處に居て、聽いて往きャれ。』

甲『早う御座れ、〳〵。』

乙『ア、モシ〳〵、各必らず出直つて來やれ。』

甲『わ早く御座れ。施米の高は五萬石、俵の數で十萬俵。』

乙『師の說法は釋迦の如くでは御座ぬ。』

甲『一人が一升、嬰兒も一升でござる。一遍でも、十遍でも、わ構ひ無し。』

乙『悉達は外道でござる。ワサ。』

甲『サア〳〵早いがわ德で御座る。』

乙『聖人は容貌恐なるが如くでござる。悟つたといふものに悟つたものは一人も無いでござる。悟らぬ者こそ悟るでござる。』

甲『何の極りの惡いことは御座らぬ、提婆尊者の施行でござる。王の誕生を祝せん爲めの施行でござる。』

乙『釋迦は邪道でござる。世界無比の正道は我が師、尊者提婆の說でござる。』

甲『緣起の善い祭米で御座る。』

乙『ア、モシ、只今說教がござるのぢや。』

甲『各位、祭米でござる。サア〳〵早く行ッでござれ。』

乙『コレ〳〵、聽いて往きャれ。』

甲『家中連れてドシ〳〵ござれ。』

乙『提婆々羅門の說教、々々。』

甲『サア〳〵早いがわ德。』

乙『緣なき衆生は度し難しとは釋迦の說でござる。之は各位、叶はぬ時の隱詞、通辭でござる。』

甲『家に財場が無くなる時は、大盡の物置でも倉庫でも借りてござれ。』

乙『師匠、提婆尊者は、緣なき衆生を斯の如く度するので御座る。』

甲『わの〳〵來年の祭には金錢を施さうと師匠が今からの話でござる。』

乙『信心も德の餘りと申するが、是は正直正法師の無い眞理でござる。』

甲『今年は米の施行、來年は金錢の施行で御座るぞ。』

乙『食はずに誰が活きてござる。』

甲『谷〳〵再來年はれ米とれ金の施行、大變でござる。茲にも、世間に人鬼なしと申す如く、狹い世間では御座らぬ、施米施金と申すものでござる。』

乙『釋迦が鋭では御座らぬ乎、日に一粒の米に一粒の麻の實、聞いて呆れるで御座る。』

甲『その次年こそは金銀七寶でござる。』

乙『六年の苦行難行も水の泡、トゥ〳〵兜をぬいで、山からノソリ〳〵、百日の說教、屁一ッで御座るよな。』

甲『いかゞで御座るの、大層なる譯柄なものでござる。』

乙『各々食ふて、衣て、動產とやら、不動さまとやら、やゝこしいことも必用では御座らぬ乎。卽ち王法でござる。』

甲『御師匠、提婆婆羅門の御威德は此の如くでござるテ。』

乙『悉達の敎は王法が缺けてござる。片輪車で御座るわやい。』

甲『サア〳〵施米は此地、此地。』

乙『サア〳〵聽いてござれ。山の敎ではござらぬ、人間の敎で御座る。』

両人、聲かれる。

甲『遠慮は御無用〳〵。』

乙『自分で食することも出來ンで、今日は他人樣に食はせて貰ふて居る分際で、――人を敎導する、阿呆らしうて、物が言へぬでござるわサ。』

甲『サア〳〵施行、施行。』

乙『釋迦は怠惰者でござる。幼少い時から仕事が厭で、骨折ることが第一嫌。』

甲『施行は此門の內で御座る。』

乙『各々いかゞで御座るな、自分の濟度も仕かねるものが、他の濟度は思ひも寄らぬことでは御座らぬ乎。師匠の敎は自ら救ふて而る後、他を救ふ。ナント如何でござる。』

甲『サア〳〵遠慮は御損、食ふと食はぬとの境、鐵面が勝で御座る。』

乙『ア、モシ〳〵只今說敎が。』

甲修道者は高聲にて呼び入れる、乙修道者は銅羅を叩き、低聲にて呼び留める。種々の科、二人夢中の體。

一時、人絕ゑ森とする、二人疲勞のこなし。

甲『ドレ〳〵、骨の折れたことでは御座らぬか。』

乙『いかにも、疲れた。』

両人顔と顔。

二人『ことで御座るの。』

甲『ナント御同役、かく申すも如何ながら、大人いかに呼び留むるも、居殘るものゝ一人も無いは、何んとしたことで御座らう。』

乙『やつがれも其事、不審に存じ、旁々心に懸るは師匠の咎。』

甲『いかにも、〳〵。』

乙『旅行に假托、寄り來る者共、城門外に集めて置けとの言渡し。ナント尊公。』

甲『アイヤサ。』

乙『某に代つて、呼び留めて試ては下さらぬか。某は下手と見ゐるワサ。』

甲『ろの儀承知。』

乙『然らば某。』

と交代し、二人四方遠望のこなし。

奏樂の音。

二人坐に返へり。

甲『時に御同役、直ぐ參ると申さるゝ師匠も見ゐず、人も來ず。先刻からの呼び通し、此咽喉がセラついて、聲は痛聲。』

乙『某とても其如く。』

甲『ナント此の間に、門内で。』

乙『休息なして。』

甲『呼留めの新法でも。』

乙『講究して。』

二人『置かうではござらぬか。』

二人、門内に入る。

勇ましき奏樂の聲。

唄。惡計の程は白澁の。組んづほぐれつ思ひの海。望めば遠し雲と水。及ばぬ戀の阿難さま。とは露しらぬ瑠璃嬢が。こがれ慕ふてれ城の門。

こゝに瑠璃女。金髪を亂し、氣も狂亂の姿にて、下手より馳せ出づる。

四邊を見廻はし、門を窺ひ、往きつ、戻りつ。

瑠『たゝ嬉しや、此處はれ城の東門、鶴の御山からは一筋道、幸ひ此處に人は無

し、人目に悪らぬ其内に、逢ふて、話して、今迄の、口説をたんと言ふて遣る。戀がれ暮ふた阿難さま、逢ふたらホンに嬉しふて、私や何から何う云ふて、よいやらトント分らぬわいな。アヽ術ない、術ない、ホンに私としたことが、生れて初めて此の苦勞。』

唄。思ひ廻せば父、母が。十八年の其間。御手にかけしも此ためかと。思へば いとゞ哀れさの。今身に泌みる親の恩。れもひ遂げずば此儘に。之が此世のわれ別れかと。娘の胸も張裂く計。泣き崩折れて居たりしが。

瑠『たゝ左様ぢや〳〵、大事ない、阿難様はこの國中の思物、ろの阿難様からこの私へ、コレ、此通り嬉しい便。』

懷より取出す一葉の青葉、押頂くやら、抱めるやら、有頂天。

唄。願叶ふてこの心。屆いて下しやんしたかいのと。これといふのも。

瑠『ホンに春殿は命の親、生の親より添けない。れ前が此の世に居やしやんせぬと、私や生きては居ぬわいな。』

唄。思ふ殿御と添伏の。れはもじ乍ら共白髪。これこの通りれた春殿。私やれ

前を拜むぞへ。九十九までも百までも。二世も三世もあの殿御。契をこめて女房と。云はれて暮す吾つまの。髪も延して還俗させて。主は大王ハテ氣懸りなと。末の末まで物案じ心も夢幻。

瑠『たゝ左様ぢや、どうせ不束なこの私。愁案じ過してどぎまぎと、可笑しな事になるよりも、寧そ思ひ切つて、言ひたいこと、思ふこと、何も角も言つて了う。そうぢや〳〵、その方が、一層隔てがとれてよいわいのう。イヤ〳〵左様で無い、左様で無い、噂に聞けばつい此春、出家を遂げて御山の御弟子、今ではれた髪も落されて影も形も御山から、里へは見せぬ阿難さま、この一月が千萬年、ホンに月日を恨んだわいのう。それが嬉しや此たびは、帝誕生のれ祀に、大勢れた弟子もある中で御山の使者に阿難様。とは言ふものゝ女ゆへれ髪も下され今迄も、御山下山も無い位。ヒョンな事でも言ひ出して、わたしや、嫌はれてはならぬわいのう。もしや若し此限りに、御山の奥の其奥の、人も行かれぬ谷間へなと隠れしやんしたら、私や、最う今日が見納、これ限り遭へぬことかいのう。わたしやそれが悲しい、厭ぢや〳〵。と言つて、ホンに厭ぢやとて、是れが言はずに濟ませりよかいのう。〳〵。たゝ左様ぢや〳〵、言ふて愛想を盡かされ

て、それで私が嫌はれたら、生れ變つて來るわいのう。〳〵』

唄。夢かと見れば夢でなし。いつそ夢なら疾く醒めてと。恐痴に返へるも娘氣の。

瑠『ホンに女といふものは、何うして斯ういふものかいのう。私や男と生れて來たら、斯うした憂目は知るまいもの、何の祟でこの姿。』

唄。どうせ、叶はぬ緣なら。切めて夢なと夫婦の名乘。たとひ一日半日でも。

涙ふて暮して見る夢なら。覺ましとも無い。覺ましやせぬ。阿難樣いの

阿難樣。御名を呼べど應答はなし。

見る〳〵逆上の體。城外を駈け廻はり、〳〵忽ち坐しつ、忽ち起きつ、聲振上げ。

瑠『阿難樣いのう！。阿難樣いのう！。』

修道者二人、門內より出で來り、この樣子を見て驚く。

甲『コリヤ〳〵女中。』

乙『いかゞ致した。』

瑠『阿難樣いのう！。〳〵！。』

甲『先刻より阿難とやら。』

乙『阿難、々々と。』

甲『コリヤ女、其方は一體、何國の何と申すものか。』

乙『我僧に申せ、〳〵。』

瑠『阿難樣いのう！。〳〵！。〳〵！。』

瑠璃女卒倒す。二人狼狽のこなし。群集潮の如くに出で來り、此樣を見て、口々に罵り、さしのぞく。

唄。番の花も彌生月。に城の春に咲きかけて。はや散りかゝる白露の。乾かぬ袖も綾にしき。提婆婆羅門威儀儼然と。立ち出でたまひ。

提婆、花道より出づ。

一同平伏す。

制札の下に瑠璃女横はる。花道にて。

提『騷がしい其有樣、コリヤ両人、其處なる女人は、いかゞせしぞ。』

甲『はッ、はッ。誰んで言上し奉る。』

乙『此なる女、亂心なし。』

甲『阿難の君を戀がれて慕ふて此通り。』

乙『只今此にて。』
二人『卒倒いたして御座りまする。』
提『ウム。愍然なり。人の一命。いで我活かして遣はさん。』
徐々と、瑠璃女に近より印を結び、呪文を唱へる。
一同平伏、舊の如し。瑠璃むつくと起上り、跪へる。
瑠『阿様いのう！。阿難様いのう！。』
提『コリヤ女人、汝が尋ねる阿難とやら、必ず、面はして、遣はすぞよ。』
瑠『ホウ、スリヤ、あの阿難様と。ろんならあの、スリヤ何處でかいのう。』
提『今此處にして。』
瑠『ねッ。スリヤ、眞實かいのう。』
提『疑ふ勿れ、我は是れ斛飯王の太子にて、其方が戀がるゝ、阿難の兄。』
瑠『ねッ。』
提『山なる釋迦とは從兄弟なる、世に隱れなき提婆羅門。』
瑠『そんなら尊者は阿難様の。』
と泣き沈む、提婆冷然。

提『妄語いふてなるべきや。』
瑠『スリヤた兄様であつたかいのう。』
と身を震はして嬉し泣き。提婆、一瞥。
提『かならず逢はし遣はせば、少し其處にて身心を、休めて、わが說く法を聽け。』
瑠璃、心も心ならざる體にて、制札の下に坐す。
提婆、上手群集に向き直る。
一同、提婆を中に環坐し、慴れて頭を上げず。
唄。唯と應答もそこ〳〵に。提婆婆羅門威儀とゝのへ。
提『こりや者共、承はれ。天にまします梵天は、今日われを汝等の、中につかはし教訓を垂るゝ、御聲に耳を傾けよ、聽くものの必ず天に登らん。
我が說く敎は、愛の道なり。この愛人の愛ならず。天に在ます大神の、平等無限の大愛が、此世に顯はれ生々と、人に作らく愛の一道。聞かざるものは冥罰を、受けて火坑に淪まんのみ。
三世十方。絕對、無限の實態は、大觀すれば因なし果なし、この時何處に因果あらんや。人々梵天の聲を聽く可し。見よ、神は、この天地萬物を造り給ひ中にわ

れらをつかはして、之をば長と定めたり、過去と未來を實有と着し、三世を談る因界の邪說、必ず、必ず、惑はされ。過去と未來が有るならば、我儕見つべき筈なるに、世界の人の誰か見て、之をわれらに語りしぞや。しかのみならず五天の學者、われ其說を一々と、討ね糺して見たりしが、過未を實有とするものは、山の中なる悉達のみ。

見よ、暗の夜も梵天の、神の光に照されてわが棲む斯世は光ならずや。光かゞやく明るき斯世、誰も實有と說かざれど、實に有りとは誰も知る。わが說く道は現世の敎、この世の人に幸福を、授けて苦を拔く、愛の道、必ず疑ふこと莫れ。見よ有形の此世をば、形を以て目前に、救はん爲に我來れり。弱きを扶け、病めるを慈し、苦むものを慰めて、惱める者を安樂に、悲む者を懼ばせ、飢ゑたる者には食を與へ、渴するものには水を惠む、これ梵天の愛の御心。

人々耳を傾けて聽け、世の衣食に窮するものは、心靈を救へとは言はず、衣食を救へと喚ぶならずや、此場に臨んで無用の企圖、今その心救はんと、擬勢を示すは悉逸にて、衣食を救ふは是れ茲に、はゝ控へた婆羅門、提婆なるか。

耳、ある者は承はれ。命有つての物語肉體は命の親ならずや。肉體なければ生

命なし、生命なければ心靈も無し。本の肉體を末にして、末の心を本とする、釋迦の邪說は去ること乍ら。

父の許もなく出家し、後は野となれ、山となれ、山の苦行も幾か六年、これも實際は四五年の、難行廢めて古池から、柳の枝にむしり付く、蛙の如に這上り、腐つた牛乳に殘り飯、僅かの粥に舌皮、唇なめて樹蔭に仆れ、その儘國へも歸へられず、われと等しき太子の身にてあり乍ら、親の耻まで此國で、業を晒らして徘徊き廻はり、人の軒端に哀を乞ひ、露命を繋ぐ非人乞食。噂に聞けば三日とやら、施す人のなかりし爲、非人仲間と食せずに山に展轉してたとやら。憚ん乍らこの提婆、いかなる故か尊敬され、金銀財寶は海ほど山ほど、施す後から布施供養、今日の施行がこれ善き、證據。

彼が生れし七日目に、母なる摩耶を殺せし上、二十九年が其間、父を惱ましまり、それより己來今日が日まで、恩ある親を顧みず、老の涙にかき暮れたまふ御父王を養はず、國の世繼と賴をかけし、彼が弟、難陀まで、之を父より奪ひ取り、不孝積つて成等正覺、佛陀と名乘るも、フヽ凄じきよな。

梵天これを惜み玉ひ、種々に方便善巧の、或は智慧の父となり、或は慈悲の母、

と現はれ、嗔しつ赫しつ、焙め懲らす、者共釋迦が左の足、醜き態を見ざりしや。われは從兄弟の好も有り、旁々説いて聞かすと雖、剛情我慢の彼悉達。げに小人は養ひ難し、過去七佛の説とやら、微の生へたる古代の妄説、荒誕不稽の因果應報、誰か眞とする者あらん。

見よ〳〵悟り顔なる恐人の悉達、山の釋迦、不孝もの程不憫が增る、親の御慈悲に附入り、あの狀。生れ故郷を食ひ荒らし、國の財寶を絞り上げ、民の痛苦を顧みず、政治は眞暗、國は亂脈、是をしも奈落の罪に非ずとせば、何をか無間の業とや言はん、人々いかに、彼が教は、國を治むる爲ならで、國を亡す天魔の屬國の賊！。

隱れたるより顯はるゝは無し。見よ見よ自ら佛陀と號し、聖法を瀆す、奸智に長けたる大惡黨！。五欲の煩惱、六塵の霧、之を拂はん方もなく、妻の耶輸陀羅、子の羅睺羅、側に引寄せ弟子とは名許り。人目を繕ふためなるか、彼が叔母なる喬曇彌、之も御弟子と名を命けて、山に隱れて愛妻愛子。知らぬが佛人はいざ、一から十まで、へゝ見抜いて置いたこの眠力。

コリヤ者共。眉に唾して善く承はれ。今日はいかなる日柄なるぞ、畏れ多くも

國の主、頻婆娑羅大王御誕生の、世にも珍出たき祭日ならずや。かれ悉達、斯かる不德の身たり乍ら、昨日態々大王より勅使を以て一山へ大の御供養。その節説法の爲、彼に下山を促せしが、疾と稱して坐を起たず、不孝不悌のわが弟、阿難を使者に下山のよし、大王之を聞召し、日頃の信仰サラリと捨て、逆鱗あるとうけたまはる。申すも畏きことながら、若しわれ大王たらしめば、かれに衣食を給せぬやう、檄を飛ばして諸國と一味、世界の外に放逐なし、殘る奴原引括り、恒河に投じて魚腹を肥やし、漁業の擴張、國の經濟、民の福利を計らんには、者共いかにサ、幸福なるゾヤ。』

ドンと打出す太鼓の音、續いて起る天樂の響。

唱。一座たどろき瞻仰る、虛空。青天たちまち二に裂け。

天忽ちに開け、滿地、光明の大光景と變ず。光り强く、提婆も仰ぎ得へず、一同慴伏す。

此時天に聲あり、一偈を説いて曰く。

「自法愛染故
毀呰他人法

難持戒行人
不免地獄苦。」

唄。はつと計りに流汗びつしより。有繋大膳不敵の提婆。震ひ戦き居たりしが。四邊を見れば此はいかに。光は消ねて跡方なし。此幸ひと當意卽妙。

提婆、たづ〳〵起ち上り、一坐平伏の狀を見濟まし。

提『頭を上げよ、〳〵。』

と一坐を見廻はし、態と動せぬ口調。

一同恐る〳〵、かしらを上げ、安心の體、皆提婆を仰ぐ。

提『コリヤ者共、今の異變を見たりしか。』

甲『はッ、はッ。』

乙『われらいかにも恐れ入り。』

一同『たてまつッて御座りまする。』

提『ワッハ、ハ、ハ、。是しきの異變恐るゝイヤサ、驚くには足らず。これ皆われ〳〵の言葉の證、われは神より遣はされし者なるを證せんため、梵天加被して

今の奇瑞。コリヤ者共、いかに〳〵。』

甲『はッ、はッ。謹んで言上し奉る。われら愚昧にて、委細は更に存せざれど。』

乙『只今の奇瑞は。』

甲『確かに梵天の示現、神の霊告。』

乙『それに相違は。』

甲『些も御座、ありませぬ。』

提『然あらん、さあらん。吾が說く教は正義人道、邪を破し正を顯はす語、梵天いかで擁護せざらん。

見よ〳〵今し虛空に響く、大梵の偈にも自らの、法を愛染なす爲に、他人の法を呰り毀たば、戒行たもつ人と雖も、地獄の苦み、免れずと、神の御聲にあるならずや。山なる悉達、自稱の佛、何物なれば怪し氣なく、わが大梵を疑謗破滅、異端と斥け、外道と罵り、言語道斷、不敵の振舞。やがて近づく恐人の自滅、墮獄は必定、ハテ、愍然なものざやなア。』

此時、花道より釋尊の使者阿難いづ。

（舞臺にては一同、祈禱にとりかゝる。）

唄。象歩の程もしづ〳〵と。目的す彼方はうす霞。花爛熳の城ならで。涅槃の彼の岸。菩提の道。げに端厳の御姿。面容たとへば満月の。御呢は青蓮花。悠々〳〵とこそ歩ませ給ふ。

（木蘭色の袈裟、漆の錫杖）

阿『實に眺むれば山も山、河も昔にかわらねど、疑り果てたる我が心。師命に任せ、夢の跡。世俗の君主、いざ、訪ね見ん。』

提『提婆、阿難を見るや、素知らぬ體にて。コリヤ、其處なる瑠璃とやら、われ今神の默示に遭へり、汝只今、コリヤ、阿難を見よ。』

瑠『ねッ。』

瑠璃頭を上げ、物色す。一坐驚ろく。

阿難、徐々と舞臺にさしかゝる。

瑠『たやッ、阿難様ぢやわいのう！。』

と走り寄り、縋りてヨヨと泣く。

阿難、驚ける色なし。

瑠『のう、コレ阿難様、私やた前ゆへ此苦勞、不憫とも何とも思はしやんせぬかいな、エ、餘りぢや、〳〵、餘りぢやわいな！。』

唄。身も世もあらぬ娘氣の。衣にすがり。ヨヽと泣く。涙の顔を振り上げ〳〵。

瑠『一目なりとも今一度、た顔が見たいばつかりに、わたしや、いまゝで存たわい……な。』

唄。跡は詞も泣いじやくり。これが此世の見納かと。見上る御顔。見下す聖。

（これ迄默然たる阿難この時瑠璃を顧みる）。

唄。みれば魂々たる尊容に。瑠璃は思はず手を放し。己忘れて居坐り直し。

うなだれかゝる花顔。畏れ謹みかしこまる。

阿難、微笑し、三歩退いて瑠璃に語る。

阿『世に背き、家を遁れて人間の、數にも入らぬ世捨人。四邊を見れば眞實の、人影絶えて目に入らぬ、涯なき野に行き暮れて、今は世になき親の名を、呼ぶ孤兒の旅路の空。獨り生れて獨り死し、獨り來つて獨り去る、苦樂の道はことなれど、自ら之を

當くべきのみ、わが身に代るものは莫し。よきひとよ。われら形を改めて、孤り赴く旅衣、遠く他國に到りなば、能く見るものはあらずかし、げに其先は窈々冥々、別離すること久しく長し。よき人よ。道路同じからざれば、會見ることも期し難し、甚だ難し、甚だ難し、いつを何時として復値はん。役にも立たぬ世の戯事、何ぞ皆捨て、平生に努めて善に志し、一心不亂に身の解脱、度世をば願ひ、無量壽の、生命を獲させたまはざる。

さは去り乍ら夢の世は、因果を疑ひ三世を信せず、黑きを白とし、白きを黑とし、人死して更りて生れ、惠施して福を得るを信せず、善惡の事すべて之を信せずして、これを然らず、かゝると、終に有ること暗の夜に、迷の種は盡きざるぞかし。先人祖父、固より善を爲さず、道德を達らず、身恐かに神闇く、死生の趣、善惡の道、自ら見ること能はぬのみか、語り聞かするものは無し。

よき人よ。この世は一切顚倒なり。これ妄想の所作なれば、皆悉く過ぎ去るべし常に保たぬ人の世に、愛着なして迷はんよりは、阿耨菩提の峯に入り、自然快樂の國を見て、涅槃の城に。菩提の道に。』

提『ウフ、、。ソッハ、ハ、、。譯の分らぬろの口說、何の事やら、根ッから、葉ッ切り、根切り虫、鍬の頭で往生晒す畑の中の冬瓜坊主。釋迦の臺詞を口寫し、今問へるか、ハヤ問へるかと、この提婆は兄丈に、流汗がたら〳〵。コリヤ阿難、出家は遂げても、色氣の捨らぬ青道心、其處なる女に附文して、貰ひ溜の布施までも、叩いて貽つた執心もの、よもや知らぬとは、フ、、言はれまい。この場に及んで卑怯未練、人目を繕ふ似而非沙門、コリヤ瑠璃とやら、この兄が、斯く取持つに何を恐圖々々、なし居るや。サ、、早く、證據の二品、面前へ突き附けて、見せて遣はせ、〳〵。』

阿『思ひ設けし事ながら、わが兄上は、かく迄に、邪道に陷り玉ひしか。』

類りに促せども瑠璃、只だ端然と俯向く。提婆、憤怒の科。

提『ヤ、、己れ、邪道とは過言無禮、今一度、ほざいて見よ、汝兄をも兄とせず、却つて他人の悉達に就く、是れ明かに汝が邪道。』

阿『名利の爲に魂痳れ、眼眩んで其有樣。悉これ兄が惡企、今朝道すがら村里にて、その二品も誹謗の種、御身が作りたるならずや。齡はわれより二昔も、先に生れて、出家をなし、行じて沙門と作り玉ひ、此の世の外の御身にて、帝誕生の

祭に托せ、俗に阿ねり、君に諂ふ施行施米、人を聚めて、至尊を讒謗、今も今天地の變に遭ひ乍ら、虚空の一偈も、梵となし、人を偽り、本心を、欺かる愚かさ、その拙さ。城東門に習を張り、瑠璃の妄念煩惱を、惡用なして大勢の、中にてわれを耻しめて、如來を毀し奉らんと、はかりし事も、悉破れ。』

提『エ、言はせて置けば限が無し。コリャ者共、彼奴を捕へて、撲つて、撲つて、撲ち殺せ。』

二人『は、はッ。』

と両人打ち懸る、阿難一驚、両人畏縮す。

阿『惡は必ず成就せず、兄上、其に、返れ、〳〵。』

提『ヤア〳〵兄に向ふて要らざる雑言、うのれ返へれとは無禮至極！。』

と提婆立ち上り。

提『ハヽ、何を恐るゝ、間抜腰抜。コリャ合圖の笛を鳴らせ〳〵！。』

両人ヤット笛を鳴らす。門内より腹心のもの五六人現はれ、阿難を圍み、スハ打ち懸らんとする處にて幕。」

第二齣

王宮

登場人物

頻婆娑羅大王
皇后韋提希夫人
臣拘耶陀
阿難
相師の翁
臣奈金陀羅
其他諸臣

王宮奥御殿の景、舞臺一面御殿にて、荘厳を極む、中央には、國王、夫人、相並びて玉座に懸け玉ふ。傍に寶座を設けあり。正面には白玉の階左右は瑠璃の欄干を廻らし階下に、奏者一人恭しく伏す。上手下手に咲き乱れたる花の樹、紛々として落花狼藉。鞨鼓の音に

て幕あく。

唄。天長地久。君が御代。萬々歳と謠ひ納めて。今日の御宴も果て給へば。大王には。龍顔こゝに麗しく。國母章提希夫人もろともに。奥殿さして入御ある。天は朗。地はしづか。野は萬民の懽樂や。こゝは禁裏の春日和。風はそよ〳〵。花はほろ〳〵。ほろ〳〵〳〵と吹雪する。階下に奏者うづくまり。

奏者、畏る〳〵少し頭を上げ両手をついて、慇懃に。

拘『臣、拘耶陀、謹んで伏奏し奉る。先以て今日は、御芽出度きれ上御誕生の祭日、御儀式も滞り無く相済ませられ、臣、いかばかりか慶賀の至、夫に付き早速、聞ね上げ奉りたきは、餘の儀にては候はず、珠てれ上より、下し置かれたる御内命。今朝は、百口満願の曉にて候へば、城外を南に距ること七里、彼の多聞天の祠に詣で、星を載いて、臣、拘耶陀。これより十年の命にて候はゞ、五年に縮め、五年の命にてあるならば、之を一年に縮めてなりとも、わが大王に、何卒太子を授け王へ、と祈念を籠めて候ひしが、夢にもあらず、幻、にもあらず、四邊忽ち明くなり、祠を見れば光明赫々、見るも眩ゆき光の裡に御聲あり、「やがての内に

示現あらん。」と其聲いまだ此耳にあきらかに殘りて候。さすれば是紛れも無き多聞天より、祈願成就の靈告と存じ奉る。畏れながら、臣、この旨を奏し奉らんため、喜悦の餘り、御奥をも憚らず、喘ぎ〳〵、斯くは推參つかまつる。』

王『過分なるぞよ。』

拘『は、は。有り難きその御諚、拘耶陀身に餘り、感泣仕る。』

王『シテ其多聞天の示現どやら。』

衆『やがての内とあるからは。』

王『近きにあるべし。』

衆『自らも。』

王『身も之を樂みに。』

二人『待ち居るぞよ。』

拘『必ず〳〵御安堵あつて然るべく、れ上に於かせられても御心長う、時節を待たせられまするやう。たゝ心地よや〳〵臣も、祈願を籠めし甲斐あつて、この靈告。ことに今日は、大祭日、旁々以て恐れ乍ら、悦ばしき儀に存じ奉る。』

王『拘耶陀。』

拘『はッ。』

王『汝も今日を喜びくるゝか。』

拘『はッ、はッ。恐れ入り奉つるその御諚。』

王『コリヤ拘耶陀。』

拘『はッ。』

王『かの庭前の落花を見よ、静心なく散る花は、拂へども猶去りがたし、萬民は身が爲に祝し奥るゝは嬉しけれど、六十路の坂を六越にて、今は白髪、日は暮るゝ、路なほ遠き心の空。』

拘『長れながら、わが王の、大御心は去ることながら、太子御誕生の曉も、必ず近きにあらせ玉はん。願くは、御尊慮安らけく、其日を待たせられまする樣。若しや其爲に、御惱み重らせられ、玉體を損はせ給はん其時は、太子御誕生あらせらるゝも、御甲斐なし。若し又、神靈告の示啓もなく、愈々太子御誕生あらせたまはぬに於ては、この拘耶陀一旦神に獻げ奉りし命にて候へば、誅に伏して相果つるも、更々後悔は候はず。命にかけての臣が苦衷、何卒御鑒察あらせられ、努努叡慮の程を、煩はせ給はざるやう、恐れ乍ら願ひ奉る。』

王『いつも替らぬ汝が心底、若し太子、出生なせし其の時は、褒美は汝が望に任さん。シテこれは態と身が、當坐の引き出。』

拘『は、はッ。』

王、帶劍を解いて渡す。拘耶陀押戴き。

拘『有り難き仕合に存じ奉る、然らば、之にて。』

王『れゝ大儀。』

拘『大儀。』

王、座に復し拘耶陀上手へ這入る。

笙の聲かすかに聞ゆ。

王『恒河の南、山高く、水靜かなる高原の、廣袤すべて三千餘里、民は一億、兵強く其名五天に隱れなき、わが羅閦祇の大國も身が亡き後は、誰にか之を讓らんと明暮思ひ煩ひしに、今も今とてかの物語、御身はいかに。』

拘『されば只だ今、拘耶陀が言やる通りなら、わが身のことは兎も角も、二人が仲の初子の顏、早う見たいは山々なれど。』

王『當にはならずと。』

『今さらに、疑ふことにはあらざれど、ろの昔よりこの歳月、萬の神に願をかけあらゆる祠にも參籠なし、祈願をこめし甲斐も無く、われらが爲に子を授けて、下さる神はなかりし故。』

王『ウム。』

『拘耶陀は彼の樣に言やれども、若しや若し、待てど啓示のなかりし時は。』

王『イヤ、苦しうない、心得たる、落膽は致さんぞよ。』

『左樣にはさば、よけれども、喜憂じて悲と、なる日の若しやなからずやと、苦勞にするも、恐痴ゆへに。』

王『必ず、苦勞にしてたもるな、老ひたりと雖も、身は是れ王舍大城の主、國と國との戰に、勝つことありとも、敗れしこと、曾て有らざる頻婆娑羅。』

『鬼神を挫く、豪傑も、稚兒ゆへには泣くとやら。』

王『イヤ、泣かぬ、〳〵。』

と咽び入り、涙を拂つて。

王『泣かぬわい！。』

夫人立ちて王を勞はり、袖にて涙を拭ひやる。

『女子でさへも、泣かずに居る！。殿御の御身で、コリヤ何事ぞ！。』

相擁してヨヽと泣く。

こゝに下手より、阿難、出で來り、階下に佇み、之れを見る。

落花紛々。

阿『恩愛、はなはだ絶ちがたく、生死、はなはだ盡き難し。』

王『たゝ、其處に見ねしは。』

『尊者にて。』

王『たはせしか、先づ、〳〵。』

『これへ。』

阿難、殿に上り、設けの寶坐につく。

王『尊者には、久々にて、對顏いたす。よくこゝろは、御來臨。』

『御山にては、世尊をはじめ、變らせたまはで、在しますか。』

阿『御山に於ては、別條なし。さはさりと、日來修道の御大事、御両所には、この頃いかに。』

王『御尊ねを蒙る段、忝なし、われら至極壯健にて、相暮し居れど、壽ければ則ち

耻多しとやら、之ぞと申すことも無くイヤハヤ思へば、茫然と、取るものは齢作るは業。』

章『日來御山の世尊より、た示しは縈り居りますれど、盡は終日、夜は終宵、娑婆にのみ關けて居りまする。』

阿『齡窮すれば死となり、業重れば苦の外に、逃るゝ道はあらずかし

大王夫人、この世の榮華は前の世の、福業の現はれと知り玉はゝ、後の世長し、旅遠し。享けし壽命は長短無量、一々數へ盡されねど、大天然は何をか語れる。われら最短きものを見る如く、この目前に古今を通じ、愉らぬ姿を見たまはずや。大王夫人、最長く、最大いなる壽命を既に見るわれら、此よりも倘いと長く此よりも倘いと大いなる、壽命の中の吾等が命。見よ無際涯の法界は、唯一なり壽命また、際涯あらじ、げに法界の有樣は、壽命無量、光明無量、心も言葉も及ばれねば、只だ不可思議と大聖も、之を讃難なし玉へり。大王夫人、いかに、いかに。

われら此法界の一部として、この法界の中に住す。一分全分の相異あれど、われと、法界とは一にして、差別は無し。法界すでに無量壽の、生命を具へ居るからはわれら爭でか燈火の、如くに消滅するものならんや。限りなき生命の中に、限りある、生命のあるを焉で容さん。サ、夫人理に屈すれども、未だ事に服し難しとする勿れ。見よ、日光は四天下を照し玉へど、盲人は之を見ざるに等し、盲人見ざるが故に、日光なしと思はるゝや。われら窮りなき生命なるを、限り有るものと見て、之を悲み、終に懊惱悶亂して、か計に大樂なるを變じて苦となすものならずや。いかに大王、罪業もとより形なし、みな是れ妄念妄執の、この世は一切顚倒なり、顚倒いかで眞實ならん、妄念爭で淸淨ならん、大王夫人、淸淨卽ち涅槃なり。涅槃卽ち如來之れ淸淨の光なり。是れ大智慧なり。如來卽ち眞實なり。眞實の尊體、卽ち一切のものは擧げて如來大壽命の中に在す、これ大安穩無上無比の妙境界いかに大王この大安穩大壽命、大自然大慈悲、智惠淸淨眞實、涅槃の如來を拜したまふやいかに。』

王『されば、わが身不肖未だかくの如き如來を拜し奉らず、若し斯る如來ましまさば尊者、願くは說き玉はれ。』

阿『夫人はいかに。』

車『そは御山なる、釋尊の御事にては、にはさすや。』

阿『不也、不也、世尊は丈六の應身なり其證據には後やがて、必ず涅槃に入らせたまはん。』

車『スリヤ、御山の釋尊は、涅槃に入るとな。スリヤ、あの、入滅の！。』

阿『時節來らば、何物も。』

車『スリヤ、如來の御身でも。』

阿『生者必滅、會者定離。』

車『あの入滅の！。』

阿『因緣盡くれば五蘊散ず、四大は本の空に皈へらむ。』

王『れゝ左あらん。われも、斯くこそ、思ひたれ、御山の聖いかに、偉人に在すとも、この涯なき宇宙に、かれに勝れる者無しとは、思はざりし。シテかれに勝れる如來ましまさば、われ今之を拜し度し、尊者、疾く〳〵吾に語れ』。

阿『大王！、眞如法性は大火の飛りたらんが如し。』

王『フム。』

阿『四面、近づく可らず。』

王『……。』

阿『われ指もて指さばこの指腐されん、われ舌もて名を呼ばゝこの舌爛れん。』

王『尊者、そは未審。』

阿『咄！、大王、其心顛倒す。顛倒の見に住するもの、たとひ如來を見奉るも、ろは顛倒の如來、妄想の佛！。

正道の見に住するものは、たとひ拜し奉らざるも、如來常に見そなはせば、光の中にて光を見るに異ならず、光の力、加はりて、われら光を視るならずや、如來を拜し奉るも、今の光の譬喩の如し。

大王、如來は眞實にまします、この故に不眞實を嫌はせ玉ふ、如來は清淨にまします、この故に不清淨を遠ざけ玉ふ。されば世尊の金口にも、懈慢と弊と懈怠とは、以て此法を信ずること難し、と宣ふならずや。

大王、懈慢に墮したまふ、水は高きに止まらず、世界の谷は大海なり、いざ御暇を、仕らん。』

阿難、坐を起つ。王慌だしく手を揚げて。

王『暫し待たれよ！。』

阿『何事ぞ。』
王『われ誤てり〳〵。』
章『御山の聖を彼呼はゝり、御弟子の尊者のた腹立、妾が君に成代り、御詫を申しまする故、一先これへ懸けさせ玉へ。』
王『先々くろれへ。』
章『懸けさせたまへ。』
王『直らせ給へ。』
章『モシ阿難様！。』
王『沙門殿！。』
阿難、階を降る。起ち上る二人を見上げつゝ。
阿『悪性さらに慶めがたし、心は蛇蝎の如くなり、修善も雑毒なる故に、虚假の行とぞ名づけける。大王、夫人、何卒自重、自愛めされよ。』
阿難、威儀端然と上手へ這入る。
章『スリヤ阿難様！。』
王『沙門殿！。』

章『見捨てたまふか。』
王『戻らせ玉へ！。あな！、無殘！。この老耄を、見限りたまふかー。』
唄。呼べど應答は山彦の。慈の御山の雲わけて。聖の姿うすれ行く。
王、妃、手を携へて階上にて伸上り〳〵、望見、悲歎のこなし。（勇ましき奏樂の音。）
此時下手より一人の奏者いで來り。
奏『謹んで奏し奉る。只今、怪しげなる一人の翁、御門の外に佇み居り、わが大王に何事か、拜謁の上、只だ一言聞ね上げ奉りたき旨、これある由。』
王『われに見ねて――只だ一言――怪しの翁コリヤ、此庭へ見せ。』
奏『はッ、はッ。』
奏者下手へ這入る。
凉しき笛の聲。
花道より今の奏者の案内にて白髪の相師いづ。
奏『恐れ乍ら、只今の翁これへ伴ひましてござります。コリヤ、謹んで奏上せよ。』

翁『われは是れ、今圖らずも此城を、通行いたす者なるが、大王、未だ御子なしとは、これ、實の御事なるか。』

王『ウム身には子は無し、シテ御身は、何國の誰人なるぞ。』

翁『われは唯、今日占術を業となし、五天を巡るものなるが、太子の在處を談らんために。』

王『む？。』

翁『能々、これへ推參せり。』

王『こは不審、われには未だ太子無し、さるを太子の在處とは。』

翁『處々神に、求め給ひしとなきや。』

王『求めたれども尚未だ。』

童『靈驗はさらになかりしが。』

翁『サヽ其太子の在處を語らん。阿毘闍山の北の奥人の行かざる山中に。』

王『フム。』

翁『いま棲ひ居る、一個の仙人。』

王『む。』

翁『この仙人、久しからざる其中に、千年の壽命盡きて必ず死すべし。命絶らは後必ず、王の太子と生れ、來らん。』

王『スリヤ阿毘闍山の北の奥。』

童『ろの山蔭に。』

王『今すまひ居る仙人とやら。』

童『太子と。』

王『われらの。シテ、〳〵、その壽命を捨つるは何時なるか。』

王、妃、歎息す。

相師悠然。

翁『そは今より一年、二年、三年の、月日を經たる後ならでは。』

王『命終せずとな、ハテ、待ち難し、のう韋提。われ年老ひて明日の日も測り難きは、わ身も同然、われら若し、太子を見ずして死すならば、この大國を誰にか讓らん、われ其むかし、子無きを憂へ處も同じ摩訶陀國、迦毘羅城の太子悉達を、國の繼妃と爲さん爲め、かれが苦行の山を出で、南恒河を渡り來て、この城を過ぎ、城外の、般茶婆山の巖上に、端坐思惟を爲せし時、身も知る如く、われら

躬ら、彼の山上に彼を訪ね、わが大國を委ねしが、固辭して我に從はず、ろれより己來この歳月、われを惱ましめて、悟り顏なる山の釋迦。今も今とて乳臭き、阿難をわれに遣はして、昨日は彼らに大の供養、ろの禮も言はで、小賢しや、大音發して、われを何事！。敬ひ居れば增長なし、輪王の位を蹂躙なせる惡比丘めら！。有るか無きかの未來の說、未來よくとも現世あしくば我には用なし。供養はせぬぞ！。山には居かぬ！。のう韋提、扨苦の、興樂の、慈悲ぢや、情ぢやと、この耳の痛くなる、迄聞きつるが、見よこの歳月、苦も拔かず、樂も與へず情も慈悲も有ること無し。かてゝ加へて、阿難陀め！、惡性さらに、？。！。いや左に非ず、〳〵、心は蛇蝎とやら、何とやら、われの御嚴、供養にて、露命を繋ぎ居り乍ら、大膽不敵の盜人めら！。うのれ不屆、不埒至極！。いで、われ諸國の王と談らひ、檄を飛ばして、片端より、山賊めらを追拂はん。イヤ、然にあらず山賊らに惜可時を潰さんよりは、われらを救ひ玉はん爲、來臨ありし翁の語。サ、其處にては畏れあり、此坐へ、此坐へ。』

翁『名も無き相師、むさくろし、其儀は御免蒙らん。』

王『さらばわれ、其庭へ參つて慇懃に、拘耶陀に代り城南の、祠の神に……。』

翁『叱！。必ず、早まると勿れ。』

相師の脚下より白烟漠々と湧き出で、烟の中にて姿消失す。

奏『こはいかに、今なる翁は、何處へ行きし、翁は、何處に。』

と奏者驚き、四邊を探り見る。

王『怪む奏れ、これ神の、示現なること明かなり、拘耶陀を呼べ！。拘耶陀を呼べ！。』

奏『はッ、はッ。』

奏者、下手へ入る。王、夫人、踊躍する。上手より拘耶陀、諸臣と出で來り階下に伏す。

王『拘耶陀、喜べ、只今神より示現ありしぞ。』

拘『はッ、はッ。大王の御前には候へども、只今、此庭に侍りし奏官より、一伍一叶。』

王『聞きつるか。』

拘『はッ。承はり候ひし故、臣等、前後をも辨へず、皆此れへ。』

一同『參上仕る。』

王『汝等喜べ、阿毘蘭山の山麓に仙人棲めり、三年を經ばわが爲に、太子と生れ來らんと、今なる翁に現はれて、正しき神より靈告あり。去れどわれ老境に及

ぶこと斯くの如し、何ぞ悠々く三年の、月日を空しく待たるべき。されば吾、使者をつかはし、彼の仙に、乞はんと欲ふが、汝等いかに。』

拘『はッ。臣等いかにも、御諚の如く。』

同一『存じ奉る。』

章『さは言へど、今の翁の言葉にも。』

王『ム。』

章『必ず、早まり玉ふなと、今耳に殘る言葉の末、王には、いかゝ思召すぞや。』

王『イヤ、さに非ず、〳〵、早まるなとは急げとの反語、夫人のやうに、正直正法に取るものでは無し。裏からも見、横からも見、また倒樣にも見るものぞよ。遲れを取らば一代の仕損じ、コリヤ、地理の官を見せ！。』

奏『はッ、はッ。御召の素金陀羅、此に控ねて居ります。』

王『ム、其庭にか、近う參れ。』

奏『はッ。』

王階の下に伏し、王の命を俟つ。

王『素金陀羅、汝は地の理を司る、阿毘蘭山の奥を存じ居らん、語れ、語れ。』

奏『はッ、はッ。御諚にては候へども、臣未だ一度も參りたることは候はねど里程は王城を西に去ること三百餘里、ろの麓には伊蘭の毒草生ひ茂り、山は八百の谷より成り、山樵通はねば路は無けれど、往きたる者の物語に、谷川の流に沿ふて入る澤は、右左より山の裾、みな左前、左前と、重り合ふて候が、見馴れぬ草花鮮かに、幾萬年の太古より、斧を入れざる深山なれば、大木の梢々と雲の往來を妨げて、青天の日に時雨ふる、峻しき峯の頂は、つねに蹈れて露はれず動くものにて目に入るは、風吹き下す滿山の、搖らぐ木の葉の騷めきか掠めて通る飛鳥の影、只だ聞くものは猛獸の、日となく夜となく、血に渴ゐて吼ゆるが聞ゐて候よし、臣未だ、機會を得ずして入らざりしが、今度大王、今の一條、愈〳〵思し立たせ玉はんに於ては、是非、その御使者は某に、御勅諚下し給はるやう、偏に願ひたてまつる。』

王『たゝ、健氣な汝が志、山の樣子も今の如くば最深からん。然らば汝をこの度の、役目の使者に遣はさん。者共用意！。』

同一『はッ。』

臣下、一同平伏する。王、夫人、立ち上り、奥殿に入らんとして此方を振

向き。

王『素金陀羅、ぬ、か、る、な、よ。

素『はッ、はッ。』

ジャンと打ち出す陣鐘の音にて幕。

第三齣

深山の苔

登場人物

王臣素金陀羅

軍兵數多

山中仙人

唄。籠の方を眺むれば。霧漂々と舞ひ上る。此處は山腹峨々たる絶壁。舞臺一面の絶壁にて、樹木雜草、蓊鬱たる間、巖赤く見はれ、下は梢頭林立、雲往來す。

風の音にて幕明く。

こゝに怪鳥二三羽、下方より上へ飛ぶ。次で一匹の猿上より巖を傳はりて現はれ、下手絶壁の梢にかき上る。やがてする内に、上手雜草の中より、箕の如き大蓑、ノソリ、ノソリと絶壁を傳はり、猿の居る樹下に坐し仰ぎ眺る。蓑さはぐ。蓑下にて口を開く毎に、猿悲鳴す。遂に

遁る。墓下に向つて猿の後を追ふ。こゝに上手、山上より一尾の蟒現はれ、絶壁を斜下に墓の迹を追ふて隱る。この中絶にず瀑布の音はるかに聞ゆ、すべて寂たる阿里蘭山、山腹の景。

唄。聞きしに遜はぬ嶮山やな。青天の日に雨の聲。風かと聽けば瀧の音。巖に搦む蘿かづら。末は覃々蔓ち登る。峰は曼珠の花盛り。目には見ゆれど遙かなる。下を臨めば軍兵の。駒を留めて樹蔭れに。閃めく兜。劍の光。岩に摺合ふ物具の。響立てじと登り來る。

この時。殿角に傳はり、下より軍兵一人、腰に綱を結びつけ、一端を下に垂らし登り來る。下手大墓の坐したる處にて、無言にて綱を手繰り上げ、又絶壁を辿り上手、上へ這入り、綱を繰り上ぐ。後より續々登り來る軍兵十五六騎、前の如く次第して困難を犯し、幕上に這入り凡て無言。

唄。一歩滑らば千萬由旬。脚下見れば寒慄だつ。阿里蘭山の山腹に。流石不敵の素金陀羅。

最後に素金陀羅のぼり來り、ホッと一息。

風の音。

唄。見上げ見下す軍兵も。且し呆れて居たもしが。氣を取直し。勇を皷し。頭上に登ゆる絶壁の。蟻も通はぬ屏風岩。何かはある可き。いざ曳げと。鎧の袖を飜へし。吹く山風に嘶の。聲も谷間へ捨てゝ行く。

上より垂るゝ綱を手繰りつゝ、登らんとする處にて道具廻る。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

舞臺は深山にて大木天に朝し、晝尚ほ暗く、無人寂寞の境。正面小高き處に、天然の大洞あり、四邊苔蒸し、左右は樹立蓊鬱たり。背景は上手深林にて、下手見晴しの空に、遠く峰頂を望む。

仙人不在。

冠の樂にて幕明く。

形容枯槁せる仙人、上手より一歩毎に錫杖を突鳴らして、地上の蟲を拂ひつゝ出で來り、程よき處にて思案の科。

こゝに一羽の烏、洞窟の前を掠めて飛ぶ。

仙『ハテ、訝かしき、烏の飛びやう。われこの巖に來りしより、訪ふものは雲霧の、

四隣に啣く蟲よりは、物の氣配もあらざりし、寂たる山に、この棲居。いまも今溪谷へ下りて遠近と、木の實を拾ひ谷川の、畔を往來したりしに、嶺を隔てゝ猛獸の、吼ゆるも不斷とは異りしが、ハテ、只ならぬ擧止ぢやな。』

蟲拂ひの錫杖をつきつゝ、苔青き石階を登りかけ、下を見て、急に愕く。

仙『アッ、この血沙は？。』

四邊を見廻し、トゝ深林の方を見やりつゝ。

仙『スリャ、今の飛鳥は、手負の鳥、仲間の鳥に啄かれたか、それとも、いふのも誰成敗の仕手もない、畜生道の悲しさ、思へば不憫やる方なし。われ其むかし長壽を求め、短命の浮世を避けて、此山に、如法修行の功積みて、神仙の群に入りしが、千年の、壽命も今や後僅か。シテ、此血沙の滴を、見るにつけても、サテ、儚きは……。』

愁歎暫しあつて氣を替へ。

仙『さるにてもこの聖き、わが道場を穢したを、盞山の、寃の水にて、たゝ左樣ぢや。』

唄。左樣ぢやと許り。己が身の。塑とも待たぬ山旅籠。旅寢の夢の覺めかねて。門出の準備とは知らず。裏の林に阿伽水を。汲み取り。返へり。四邊を潔め。サテ。

仙『心にかゝるは此山の。畜類すべて怖氣を生じ、平生に變つた急ぎの氣配。コリャ、何がなわが身に係はる前表かと思はれてならぬ。何はともあれ、いで是より、天清淨、地清淨、六根清淨なる由を天地の神々に告げ奉り、わが身の勝り毎日の、勤勤讀誦、致し申さん。』

仙人洞に入り、雜草の上に舞臺を背にして坐し、火を焚き、鈴を振りて、經文を誦し始む。

鐵鈴鏘々。

仙人『大海諸名山　丘陵樹林木　地水火風等　日月諸星宿
若至劫燒時　皆盡無有餘　業於無量劫　常在而不失
（鈴。）
升盡投大海　其味無有異　若投小器水　鹹苦不可飲
（鈴。）

如人積大福（鈴）而有少罪惡
福德力轉增（鈴）心亦益柔軟
苦惱諸衆生（鈴）無是深淨法
念是諸衆生（鈴）沒在苦惱泥
諸有惡衆生（鈴）種々加惱事
背恩無反覆（鈴）痴弊難開化
我非彼所有（鈴）彼非我所有
如是正思惟　不應起惡業

不墮於惡道
即信上功德
於此生愍傷
我當救拔之
諂曲懷憍逸
大人心愍傷
彼我皆屬業

餘緣而輕受
及大人大行
而發深悲心
令在安穩處
惡罵輕欺誑
勇猛加精進
隨業因緣有

大人於妻所（鈴）應生三三想
若於子偏愛（鈴）即似智力捨
彼我不相知（鈴）所來所去處
無明蔽慧眼（鈴）數數生死中
往來多所作（鈴）更互爲父母
貪著世間樂（鈴）不知有勝事
怨數爲知識（鈴）

亦復有三三
因予行平等
彼我云何親

又復有三三
普慈諸衆生
而生我所心

知識數爲怨。』

（鈴。）

こゝに花道より素金陀羅、軍兵從へ出で來り、舞臺のよき處にて立ち止まり、いとも慇懃に。

素『此へ參りしは中天竺摩訶陀國、王舍大城の主、頻婆娑羅大王の御使者にて其臣、素金陀羅と申する者、尊臺御勸勸の中とは申し、淸淨なる聖の道場を驚かし奉り、旁々その恐れ少からざる儀には候へど、大王の御使、重々御懇望の筋、何卒、御聞取り召されまするやう。』

遙かに陣鐘の音、この時仙人、誦經を休め、座したる儘、徐ろに振り向き。

仙『世を遁れ、山に隱るゝ世捨人、この天地に誰あつて、われに用ある者あらん。』

素金陀羅、趨りて石階の下に伏し。

素『大仙の御言葉はさることゝ乍ら、國の大王には、大仙この峯に在ますことを聞召し、かつ其御仁德、大海の如く、その名五天に隱れなくはしませば、何卒いたして存生中に、是非一度、大仙と御對顏の儀、御許し下し置かれまする樣にとの懇々の御上意にて、實を言はゝ大王より、この山中に御躬ら、御訪ねあらせ給はるべきの處、國政多事の折柄、俗務に追はれ、殊に老後の身、汝參らば吳々も、わが切なる懇慮のほど、幾重にも聞ね上げ吳れよとの、御勅諚。仕儀に依つては臣しイヤサ、御眞臨の儀、萬が一御嘉納あらば、臣御先導申上げ、王城へ御供仕らん事も、これ有らんかと存じ、われら御迎の儀も相兼ねて參りし者、態々都の空を旅立して、この深山に尋ね入り、路なき峰に攀ぢ上り、身の丈餘す草を分け、死つ生つの艱難を、犯して漸う大仙の、御在家を訪ねて參りし吾等、御仁慈に渡らせらるゝ大仙には、聽かせ給はる丈にても何卒われらが申す言葉、一先御聞取り下し、置かれまする樣。』

仙『要なきわれに、用ありとは。ハテ、たぞましき出裝やなア。』

焚火燃ゆる。

仙人、向き直り威嚴を正し。

仙『大王の使者と云ひ、卿が勞苦は去ることながら、尋ねる人は他にあるべし、かならず人違ひは召さるなよ。』

素『大仙いかに隱させたまふも、臨末のイヤサ、際立ち見ゆる尊容は、紛ふ方な

き大德に、たはしますこと疑なし。仰ぎ願くば、大仙慈愛を垂れ給ひ、御腹厭なく、御聞見し、下し置かれまする樣。われら立裝こそ、猛者に扮して候へ共、惡意を懷くものにては更々候はず。われら斯く、赤誠を以て希ひ奉る儀にて候へば、大仙に於かせられても、御不安の念は、必ず御無用、御無用。』

仙『底意あり氣な面魂、尋ぬる人は疑れにもせよ、申せ、聽かむ。』

業『はッ。』

唄。申せ聽かむと宣へば、心の中に仕濟したりと、悅び勇む索金陀羅。禮儀ことと更悲しく。

業『只今の御言葉を頂戴いたし、われら如何許りか安堵至極。然らば御言葉に甘へ大王より、今度承はり參りし段、一應御聞取り下されたし。其は餘の儀にては候はず、わが大王に於かせられては、元より御子といふものたはしまさず、御聖壽すでに六十路を越ゑ給へど、未だに國の紹繼も無く、爲に御心を惱ませ給ひ、處々方々の神々に太子を授けて賜玉へと、祈れど、願へどこの歳月さらに靈驗これ無きのみか、大王には弄が爲にや御惱重もらせ給ひて今やや早、いまか早かの折も折、齡いと傾きたる一人の相師、御前に見ゐて、只一言、太

子の在處を語らんと、召されて其場にて申されけるは、阿毘蘭山の北の奥、人も通はぬ山中に、一個の仙人住み玉へり、われ嘗てろの大仙の尊容を、見奉るに、輪王の、相好たしかに具はりたまへば、拙き翁の術乍ら、術に照しつ天文の、星に合せて判ずるに、大仙に於かせられては久しからざる其中に、壽命を捨てさせ給はん後は、必ず來つて大王の、太子と產れ玉はん由、言ひも果てぬに掻消す如く、翁の姿失せ候へば驚くこと一方ならず、其場に於て臣を、使者の役目に勅諚あり。大王にたかせられては、臣出立の間際にも、重き御枕を上げさせたまひ、只今でころ、都と山、われは輪王、御身は法王、その境界は異り居れど、わが子と、開けば子も同前、親も同前。老後の身には一日も、疾く親子の名乘いたし、呉るゝ事は相叶はぬものか、汝わが身に成代り、大仙に、御歎願申し上げ試て呉れられよ。どうせ子と成る宿業の、約束ならば片時も早うと、後は御涙に掻き昏れ給ひ、側の見る目も最、御哀れにて候ひき。大仙、伏して願くば、廣大の御恩にて候へば、一時も、早く、王城に、何卒赴かせ給はる樣、偏に願ひ上げ奉る。』

仙『ハヽハヽ、。奈何なる事を申するかと思ひつるに、コリヤ、申するも件を替

へ、慮外千萬！。ろりや、ならぬ、相成らぬ。』

素『そりやいかにも大仙の御詞には候へども、何うせ遁れぬ運命と、斷念めイヤサ、其斷念めが却々つかせ給はぬ大王、大仙ゆへに御惱と、聞召さるゝも、其儀は不可と、申さるゝか。』

仙『われ當初より、左ぞあらんと見拔いた汝等。コリヤ、われを殺しに參つたなア。』

素『老耄、そは御身の邪推と申するもの、吾等いかでか、殺意あらん。』

仙『然らば何しに。』

素『王の勅諚を傳へんため。』

仙『死を急げとか！。』

素『サヽ。』

仙『自殺をせよとか！。』

素『サヽ。』

仙『ウフヽフヽ、ワハヽハヽ、。哂ふに堪へたる卿が王、歸り參らばわれ言ひしと、此の儀は堅く相成らぬ旨、申し傳へよ。』

素『スリヤ、斯くの通り、七重の膝を八重に折つて願ふても』

仙『相成らぬ。』

素『スリヤ愈々相成らぬと申するか。』

仙『煩い！、成らぬと言へば、相成らぬ。』

素『ハテ、氣の毒なれども致方なしスリヤ何うあつても。』

仙『成らぬと申せ！。』

素『ウヽ、此場に及んで、倣岸不屈な！口に餘つた手甲摺め！。申す、申さぬは吾が勝手、成るか、成らぬは王次第、自ら縱るか、手に懸るか、返答いかに！。』

仙『今は何をか包み匿さん。われ三年の曉は命終なして後必ず、王の太子と生る可し。さるを今、汝等待たず、理不盡に、われを殺すか、後日に至つて後悔すな！。』

素『死期に臨んで洒落くさき其一言。薄旨！。首と胴は離れて居るが、見わ居らぬか。ヤイ！老耄！敬ひ居れば附上り言過無禮、捨て置き難し。ウリヤ、善く承はれ、勿體なくも王舍大城の主、頻婆娑羅大王の嚴命なるぞ！。畏れ多くも吾王は是、一國の主、一天の君、國內は人と云はず、物と云はず、皆是れ王の所有に屬せり。然るを今、一天の君には故らに辭を申くし禮儀を厚くし、玉の冠傾け

て、懇懃に事を陳ぶるに從はず、これ王を侮る大罪なるぞ！。コリヤ、耳を掘つて承はれ、仙人若し、王命に從はざる其の時は、立地に命を奪へとの、勅諚なるぞ！。』

仙『われを殺しに?!。』

素『たゝ如何にも！。』

仙『スリヤ、何うあつても！。』

素『兎や角吼ねずと、尋常に、この山中にて、往生晒せ！。コリヤ者共ッ。』

一同『はッ。』

軍兵、刀を抜き、バラ〳〵ッと仙人を取り圍む。

風一陣。

陣鐘の響。

仙人獣座。

素金陀羅、抜身を翳し進み寄りつゝ聲振り立て。

素『サア〳〵尋常に往生するか？。』

一『ろれとも自ら縊つて死ぬるか？。』

二『觀念せよ！。』

山風一陣。窟内の焚火、忽ちポット燃ね上る。

軍兵慄く、素金陀羅、階下にて、氣を焦立ち。

素『ヤア〳〵言甲斐なし、今のは山風焚火なるぞ！。』

一『たゝ、風かい！。』

二『焚火ちやい！。』

三『コリヤ、老耄！。今の響を聞きつるか！。汝いかに通力ありとも！。』

四『翠から谷から皆なわが軍勢。』

五『十重二十重に此山を圍み居るぞ。』

六『とても逃れぬ運命ちやと。』

七『未練言はずと。』

八『くたばれ！。』

九『死ね！。』

十『サア〳〵素直に死ぬるか？。』

十一『首を縊るか？。』

二『舌を噛むか？。』
三『サ、唾に投じて五體を碎くか。』
四『ろれとも火葬にしてやらうか？。』
素『ねゝ瞑目して悟り顏なる其酒面、者共打て！。』
一同『はッ。』

軍兵交る〳〵打つ、蹴る、つねる、唾を吐く、樣々に侮辱する。
素金陀羅、ツカ〳〵と進みて、仙人の髻を捉へ、引き倒し、其横顏を土足にて、グイ〳〵と踏み躪る。
仙人、悲鳴を揚ぐ。
素『觀念しろ！。』
と斬り付ける。仙人、苦しき息の下より。
仙『うのれ、惜き、惡王、なる哉。ヤヽヤ、俟て、われ言ふことあり！。』
素『吼ねろ！。』
仙『うむ、口惜しやな。われ通力失せてこの山にて、悲慘な最期！。歸つて申せ！わが命、未だ盡きざるに、渠惡王！。心と口で、われを今、人手にかけて殺すから

は、われも、太子と、生れなば、見よや必ず、口と心で、人手に、懸けさせ汝を殺すと渠に申せ！。』
素『ねゝ、老耄め！。』
と又斬り付ける。軍兵一度に刀を下す。斬る、突く。
仙『うむ、無念やな！。』
素『ハヽハヽ、無念なるか！。』
一軍『口惜しいか？。』
二軍『汝、眞の仙人ならば、ろの通力とやらにて、此場を立派に免れて見よ！。』
仙『わす、るゝ、なア！。』
素『ウフヽ、ハヽヽ。忘れてならぬ仙術で、雲でも喚んで天へでも、勝手に登つて失やあがれ！。』
三『斯うされても死たくないか！。』
四『これでも死切れぬか！。』
五『くたばれ！。』
六『死ね！。』

七『此でもか！。』

仙人、虫の息にて、ヒヨロヒヨロと立ち上り、眼光物凄く、四邊を見廻はし。

仙『覺ゑ居れ！。』

入『獣れ老耄！、』

と鉦にて突く。仙人倒れる上にのりかゝり。

業『往生しろ！。』

大剣にて止めを刺し、山中蟲の聲にて幕。

第四齣

遊獵

登場人物

村民五人

同老爺

童子四人

阿闍世太子

武臣數多

黒幕

村民三々伍々、打連れて上手より出づ。歩き乍ら種々の下世話。

甲『斯う何うも我々共が、安穏に暮して行けるといふのも、畢竟は夫れ、大王様のな。』

乙『そうよ〳〵我邊がこう、何事もなく安樂に親子眷屬日暮をする、ナア、商賣とて天氣にこそ、降り照りはあるが、政道には密しの暗い處もないと云ふ、國

は泰平無事で、商賣は繁昌する、ソレ女房はドン〳〵と育つ、兒は子を産む。ナア、人頭が殖ねる、國が大きくなる、強くなる、申分は無ねてことよ。』

緒『今、金公の話の通り、是といふのも大王さまの情け深ね處からして、つまり巡り〳〵つて我儕までが、こう幸福な、境界ちやわ。に前さん逢抔は、若から知るまいがの、今の大王さまの、御若時分抔は、ろれは、ろれは、偉ねもので栩樫は二葉より香しとやらいふことは、世には能く言ふことだかの、それに違ね無ねでがすよ。利發で、物が聰明で、力はある、それに第一に慈悲深い方で、縁致はよし、學問はあらッしやる、何でも是ぞといふて、缺目の無ね太子であつたがの。』

丙『太子と云やあ、オイこの頃は、阿の字(小聲にて)には……？。』

丁『困つたい！。』

戊『奉つたい！。』

緒『コレ〳〵其樣なことを大聲で言はしやると、大變な事が持ち上るわの。(己下小聲にて。)此頃は嚴しい穿鑿が廻してあるとやら、此樣なことが、烏渡でも耳に這入つたら、ろれこそ、た前さん達の、首は無ねぞよ！。』

(己下、一層小聲になり。)

緒『阿闍世太子はの。』

甲『わッ。』

一同、一散に逃げ出す。

甲『ワッハ、ハ、、、。阿呆な奴等だ、れれだ〳〵。』

丙『ねッ、吃驚しやがつたな！。』

丁『れれもしやがつたな！。』

甲『ヤイ、ヤイ〳〵、顚倒つてらい！。馬鹿！。ハッハ、ハ、、、。』

乙『何言つてやがンでね！。コウ夫しきの件にたッ魂消る金ちやんちやア無ねや、小便に往つたんだ！。』

甲『詰らねね事を、言つたもンだ、手前出たか。』

乙『出さねねのよ！。』

甲『ハ、ハ、、ハ、、、。詰らねねぞ！。それはそふと、今の話は何うしたんだ、オ。』

緒『ヒヤア、何うも態いたの何のッて、數の分らねね事をしたもンだ、惡い酒落

だ、若ねものは眞平々々！。』

乙『ろう怒ンなさんな、何にもなア。』

甲『ろら又なア。』

乙『ねゝ交返すない！。コウ、手前が發頭人だ、馬鹿な野郎だ！。』

丙『オイ、それはろふと、今も爺ッあんの話の通り、この頃といふもなア、(小聲にて)阿の字がよ。』

丁『ワッ。』

丙『ねゝ、こん畜生！。』

乙『撲るぞ！。』

甲『まあ〳〵靜かに。うれから何うした。』

癸『それは斯ういふのだ。』

丁『ヤイ〳〵、來やがッたぞ！。』

甲『何が。』

乙『何が。』

戊『又魂消すんだらう。』

丁『いゝや、來たぞ！、來たぞ！。』

戊『童子か？。』

と耳に手を擦ひ、立聞きする童の眞似をする。

丁『うん！。』

一同『そら、逃げろ！。』

癸『こりや、こりや、待たッしやれ〳〵、ろう逃げるから覺られる。こりや、待たッしやれ、〳〵、た、こりや。』

一同花道より逃げて入る。鄰花道にて。

癸『ヤレ〳〵若ね奴等は、駄目ぢやん〳〵、何が恐かろ、一體今、日は、王城から太子殿が來つて、イヤハヤ盛んなる、御遊獵、ごりや、我儕も往んで見ようか。』

杖を突張り、〳〵、花道より這入る。

こゝに上手より童子二人、下手よりも童子二人、出で來り、正面にて摺れ違ひ、ヒソ〳〵と何か唄。折柄聞ゆる法螺の貝。狩場の太鼓。野陣の鐘。今日を晴の御盛裝に。心も勇み立ち出で給ふは。一天萬乘の御後繼。頻婆娑羅大王の御愛子にて。

阿『闍世太子と知られける。

法螺貝、鐘、太鼓の音につれて、下手より阿闍世太子武臣數多引具し、弓矢を携へ盛装して出づ。

唄。こゝに彼方の森陰より。喝ぎ〳〵馳せ付けたる。軍兵一人。はッと手をつき。

この時上手より軍兵、慌しく馳せつけ、跪いて、後ろを指し。

平『只今手負の獅子一匹、此方を目懸けて參る様子、萬一わ上に、御怪我等これ有つては相成らずと、右御注進。』

阿『スリヤ手負の獅子とな！。』

平『御意に。』

阿『面白し、面白し、コリヤ者共、參れ、參れ！。』

駈け出さんとするを制めて。

臣『御諚には候へども萬一の事あつては臣等の役目相立たず、恐れ乍ら、わ上に於かせられては、一先彼なる丘に。』

阿『逃げよとか！。卑狂者めが！。是れ放せ！。』

平『この場に隠んで兎角の御爭ひ御無用なり。唯來らば防せ玉へ、先は御免！。』

阿『ゐゝ、放せ！。高が手負の子獅一匹、たとひ萬匹寄せ來るとも、後へは退かぬ

阿闍世なるぞ！。參れ！。續け！。』

唄。參れ續けと鎧の御袖。振り拂ひ。四面に攀く矢叫の。中を目懸けて駈け出で給ふ。折柄聞ゆる鯨波。いとも勇ましき御有様やな。

太子の跡を武臣追ひ、上手へ馳せ入る。

ワッ、ワッといふ人の聲、物の音にて黒幕落つ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

舞臺一面は大曠野の景。背景は右手に遠く山の裾、左手は大森林、中央には一叢の樹立、舞臺大車輪に廻る。（木、入る。）

近く、頻りに貝、鐘、太鼓の響勇し。

いろ〳〵の山獸、野獸、夥多の軍兵に追はれて走る、逐ふ、馳せ巡り、つゝと手負の獅子に太子跨がり、奮闘しつゝ駈け巡る中太子拳にて撲殺す。こゝに雲の如き灰色の大象躍り出づ太子、之と爭ひ、闘ふ

舞臺は愈々大車輪に廻り、太子、象に躍り上り拳を揮つて、打ち惱ましし、廻轉ゆるやかになり、象倒るゝ處にて幕。

第五齣

あはせ鏡

拷問

登場人物

阿闍世太子
宮女五六人
判官一人
獄丁二人
囚人數多
頻婆娑羅王
韋提希夫人

正面、城中御殿にて、前は廣庭の夜景、殿上銀燭煌々中央には太子玉座に倚り、左右に宮女五六人、酒宴、酣の體。庭前やゝ下手に白木の杭二本建つ。

階下、上手に判官一人、床几に懸り、下手には一人の囚人縛に就き座す。後ろに獄丁二名、笞杖を携へ控ゆ。是より拷問の處にて幕明く。

判『コリャ、其處なる罪人、名は何と申するか、大王の御前なるぞ！。隠さず申せ。』

囚『はい。私の名は、孫……。』

判『小音にては相分らん、明瞭と申せ。』

囚『はい。孫陀梨と申しまする。』

判『シテ處は。』

囚『はい。奈波薩迦村にござりまする』

判『スリャ先つ頃、御遊獵ありし附近の村の者にて孫陀梨と申するか。』

囚『はい。左様にござりまする。』

判『コリャ孫陀梨！、汝は去月の廿六日、わが大王御遊獵の其砌、わが大王を種々に、惡口し奉りし由、確かなる證據あり、覺ねが有らう。』

孫『恐れ乍ら、左様の事は、夢にも身には、覺ねが御座りませぬ。』

判『コリャ、大王の御前なるぞ。』

孫『畏れながら……。』

判『默れ！。盜人猛々しいとは貴様のやうな不所存者めが事ぢやわい！、惡言はぬか！。』

孫『覺ねは、さらに……。』

判『無いと申すか！、無いなら無いで好い。言はせて見せる！。コリャ打て！。』

獄『ばッ。』

獄丁、笞にて打つ。

囚人、叫ぶ。

判『未だ言はぬと申すか！。それでも言はぬか！。是でもか！。』

孫『ヒー、ヒー。』

判『剛情な奴！。打て〳〵！。』

孫『あ、もし、申します！。』

判『ハヽ、言はずと宜い！。言ふな！。言ふな！。打て〳〵！。』

孫『申しました！。』

判『ソレ。申したと申す。枕へ繋げ！。』

獄『はッ。』

刑杭に縛し、縄にて首と胴と足を、括り付く。

判『ウリヤ、此口で悪口したか！此口が不敬に叫ねたか！。わりや、此口がある ために、この苦！。後日の患なき様に、今取拂つて遣はすぞよ！。』

判官、階下に伏し。

判『恐れ乍ら、此なる罪人、わが大王には、いかなる刑を、課し給ふか。』

阿『うむ。憎き下司！。錘を下げよ。』

判『はッ。』

両手の縛を解き、獄丁、左右より、囚人の両手に錘を下げる。苦痛の聲、見る見る青ざめ、気が遠くなる。

阿『ソッハ、ソッハ、ハ、ハ、。善因善果、悪因悪果、思ひしれよ。こら、水を吹け。』

判『ハッ。水を吹けと仰せある！。』

獄『はッ。はッ。』

獄丁。面上に冷水を吹く。よみがへる。

苦『ア、ッ、ッ、……。』

阿『錘を除れよ。』

獄『はッ。』

獄丁。錘を解く。阿闍世太子大盃を揚げつゝ。

阿『コリヤ下人！、よッく承はれ、われは是一天の主、萬民の司、然るを汝何物なれば士民の分際を以て、コリヤ、わが悪口をば、其口にて言ひつらむ、サ、遠慮はいらぬ、わが面前にて今一度、云ふて見よ。言はぬか！。言へ！言へ！。

わゝ、言はぬとな！。不所存者めが！。コリヤ口を裂け。』

獄『はッ。』

獄丁、二人にて口を裂く。

囚人、叫ぶ。

阿『ハ、ハ、ハ、ハ、。好い下物ぢや、下物ぢや。コリヤ、酌をせぬか、わが意に背かば、皆な斯の如し。よいか。よいか。

ウリヤ下人！。われ其罪を悪んで其人を悪ます、ウリヤ、汝は善人ぢやが、その

口が悪い故、われ汝に成代り、些少と仕置をして遣はす！。コリャ、一枚残さず片端より、彼奴が歯を抜け！、砕け！。』

獄『ばッ。』

獄丁。大なる鐵槌にて砕く。

四人。唸めき叫ぶ。

阿『ウフ、ワハ、ハ、。面白し、面白し、一枚と雖も残しては相成らんぞ！。コリャ、休息を與へる。獄へ下せ！。』

列『ばッ。』

獄『ばッ。』

判官、上手に連れて這入り又出づ。獄丁、下手より一人の囚人を先に立て、出づ、獄丁に渡して這入る。

列『コリャ、其處の罪人、其方は名を何と申するか。』

囚『ばい。泥紋と申します。』

列『泥坊と申するか。』

囚『恐れ乍ら泥坊ではなく、泥紋にござりまする。』

列『泥紋とな。ハテ妙な名ぢやな、シテ住處は。』

『お城下にござりまする。』

列『スリャ殺の下に在り乍ら、畏れ多くも大王を、兎や角と聞くに堪ねざる不敬な雑言。たとひ如何なる事が有らうとも、王は王たり、臣は臣たり、さるを汝辨へず、彼此不敬を申せし段、免し難し尋常に白狀いたさば好し、さもあらざるに於ては拷問にかけ、逐一白狀さするがいかに！。』

阿『ウリャ、拷問に及ばぬ、白狀も要らぬ、疾く〳〵括つて紛明せよ！。』

列『ばッ。』

獄『ばッ。』

刑杭に括る。囚人、傍らの杭の血痕を見て、戦く。

阿『ウリャ、よッく承はれ、汝何物なれば町民の分際にて、萬乘の君を罵る上、豫て四方に放ちある、見附の蠱子を打擲せしぞ！。蠱子と雖も身が使、身も同前、身ぢや！。ウリャ、よくも身を打つたな！。こりや其手にて……。こら！指を折れ！。』

獄『ばッ。』

獄丁、十指を捏く。
囚人、悲鳴す。
阿『ウリャ、髪を抜け！。』
獄『ハッ。』
獄丁、両手にて頭髪をむしり取る。囚人血流れ、悲鳴を揚げる。
阿『ハヽハヽ。山なる釋迦は口で説く、身は行ふて見せるのぢやわ。面白し、面白し、源因結果は一粒萬倍。コリャ、獄に下して置け。』
列『ハッ。』
獄『ハッ。』
判官伴ひて上手に退入り、又出づ。
獄丁、下手より一人の囚人を先に立て、渡して這入る。
列『コリャ其處なる罪人、名は何と申すか、許す語れ！。』
囚『ハい。祇耶南と申しまする。』
列『シテ處は。』
祇『撒拘耶街にござりまする。』

列『スリャ城の南門外なる撒拘耶街に住すると申するか。恐れ多くもこの王城は今度阿闍世大王、舊王舍城いかにも狹隘なる所より、新たに御建立あり し大城ならずや。こりや、大王の餘澤を受け、この大城に住居をなし、日々安穩なる生活は、悉これ誰の御蔭なるぞ！。さるを何ぞや、こりや、下郎の身を以て恐れ多くも種々と、言語に絶ねたる不敬の雑言！。ソレ括れ！。』
獄『ハッ。』
括る。
叫ぶ。
阿『この眼が悪い。コリャ下臣、用捨は無い！、挟れ！、挟れ！。』
獄『ハッ。』
獄丁、鋏にて両眼を挟り出す。囚人悲鳴す。
阿『その耳が善くない。斬れ。』
獄『ハッ。』
耳を斷つ。
叫ぶ。

阿『鼻を刮げ！。』
獄『はッ。』

そゝ。

悲鳴を揚げ、悶わ叫ぶ。

阿『獄に下して次を呼べッ。』
獄『はッ。』

使丁、上手より出で、囚人を運ぶ。下手より一人の囚人出づ。

阿『此奴よな！。彌耶の夫、補特伽羅云とやら申するな。』
剣『御意に。』
一同『御座りまする。』
阿『面を擡げよ、ウリヤ、よッく承はれわれ久しき以前より、汝の妻彌耶の美貌を愛し、宮中に差出すべき様、厳命を下し置きしに、汝妻の色香に溺れ、義を忘れ、彼は死せしと上を偽り、行々しく葬儀など相營み、竊かに床下に宝を拂ひ、匿ひ置きし不所存めが！、天命盡きて、曳き出され、今は獄舍に臨月の大腹抱いて哭き暮すも、汝ある爲、いざ！。イヤサ、〳〵、これ特別の慈悲を以て、こりや

今日は遣はするぞよ。
ウリヤ、彌耶を獄舍より曳き出し、疾く疾く、此庭へ連れ參れ！。』
剣『ばッ。はッ。』

判官、上手に這入る。太子獄丁に向ひ。

阿『此奴を括れ。』
獄『ばッ。』
阿『わりや、いかに悔ゆるとも、後悔何んの益あらん。縱し益あるとも、この世の中、誠に悔ゆるものは莫し。さるからは吾が前に於ては、懺悔も無益！。謝罪も無益！。手も足も、動かぬ様に堅固と括れ！。コリヤ酌をせい！。波々と注げ！。ハ、ハ、、悪な態き居るな！、蹶虫めら！。癲て今、彼が演ずる惱亂の悲慘な態を見物せよ！。ウリヤ下輩、下物ぢや撲て！、庭嫌はず滅多撲！、うむ憎き奴！。打つて、打つて、打ち惱ませ！。』
獄『ばッ。』
四『ヒー、ヒー、〳〵。』
阿『ウフヽ、アハ、、、愉快ぢや、〳〵、最少と打て！打て！。悶絶なさば冷水を

吹ッ掛け、脅かして、殺して、打つて打つて、打ち挫け！。ゝ、未だ足らぬ！。緩い！。力を入れよ！。』

獄丁、笞杖にて打擲する所へ、上手より、判官、彌耶（懐胎の樣子、容顏美しを曳きて出づ。

判『恐れ乍ら、彌耶を此庭へ。』

阿『ウリヤ、彌耶とやら。頭を擡げい！、イヤハヤ何時見るも美しい奴よな、ウリヤ、近う參れ、この阿闍世に酌をせい！。？。！。參れといふに、參らぬか！。參れ！。ウリヤ、參らぬな！。』

太子、玉座を離れてヅカヅカと階を下る。

阿『外面如菩薩、內心如夜叉、女郎！、頭を上げい！。ウリヤ聞ゐぬか！、耳は無いか！、ゐゝ！。』

大盃を投げつける。目を瞋らし。

阿『この剛情女郎！、一天の主に耻を與へて心地よいか！。不憫なる奴なれども致し方なし、ウリヤ、好き當座の酒の下物、料理は阿闍世の方寸に、丁と疾くより仕組んであるワ。ウリヤ、よッく承はれ、高が女郎一匹、我が意に背かば理が非でも通すが阿闍世、殺すは容易。サ、其を、今が今迄活けて置いたは、われ其むかし、幼少の頃より懐胎なせし女の腹を斷割つて、見たいものぢやと思ひしが、今は幸ひこの大腹。乳下より眞一文字、突裂いて、腸ぐるみ、胎內より赤兒を攫み出し、ウリヤ、酒興を添ねなば、恨も晴れんと、產月まで、われや活かして置いたのも、知らずに、剛情張り通した、積で今まで居りつらんが、イヤハヤ立派な眞女よな！。これを今際の引導と、ウリヤ、有り難く承はれ。』

綱『スリヤ、妾の、あのわれ腹を、斷割て！。』

阿『たゝ如何にも！。』

綱『ゐゝ、スリヤたれ情なし、あんまり、情が、ない！、わいな！。夫ゆへなら妾の身は、たとひ、八裂に裂かれても、厭はせねど！。聞から聞へ、罪も、報も無い、此兒を遣るが悲しい！、不憫じや、わいな！。どうぞた慈悲ぢや！、た太子樣！、せめて此兒を產落しまする其迄の、命の御猶豫、下されまし！。』

阿『汝や、其兒が可愛いか。』

綱『はい。』

阿『眞實、赤兒が可愛いなら、よもや、われに從はれぬことは、あるまい。わりや、こ

の阿闍世に從はゞ俱助かり。赤兒の命が乞ひたくば、素直に我に從ふか。』

彌『サアそれは。』

阿『それとも此處で殺されたいか！。』

彌『サアそれは。』

阿『サア。』

彌『サア。』

二人『サア、〳〵、〳〵、〳〵。』

阿『ねゝ、沒分曉め！。優しくなし居れば吾を甘しと見縊りなし、赤兒ぢや夫ぢやと、詰らぬ義理！、古代の遺物！、わりや殺すからは一家親族悉な殺す！。どうぢや、女子の智惠、語るに足らずとするも、是程に明々白々たる利害得失、解らぬ筈は無し。わりや、從はゞ夫も兒も一家親屬みな活きる。一身亡びて皆殺すか！。一身榮ねて皆活かすか！。サ、今際の一言、いざ、返答いかに。』

彌『れ情こもる其れ詞、重々骨身に泌みて有り難い、勿體ないとは、思ひますれど。』

阿『ヤ、ヤ』

彌『たとひ御腹の赤兒諸共、この身はズタズタに斬られて死ぬるとも、夫に濟まぬ、厭ぢやわいな！。』

阿『ハ、ハ、ハ、、、。其樣に嫌はれてはこの阿闍世も閉口至極。わりや、その樣に夫が大切か。』

彌『はい、…。』

阿『默れ！。眞實夫が大切ならば、われに從ひ夫の命、何故助けて、やらうとはせぬ、ぞ、よ、コリャ。この阿闍世を拜むがよいぞよ。われ格別の慈悲を以て今日！女郎が戀しと思ふ夫に、遇せ遣はす、ウリャ、其處なる杭に、サ、、能く見よ。』

彌『耶、夫を見て己を忘れ、飛立つ思。

『オヤ、れ前は夫！。まあ、その姿は何事ぞ！。情ない、情ない、ねゝれ情が無さ過ぎまする！。』

夢中となり、走り寄らんとする女の襟首、ムンヅと捉ね。

阿『狂人！。わりや、これ程に愛する我の、面當に、うゝむ、憎き女！キリ〳〵括れ！、括れ！。』

獄『はッ。』

獄丁、叱き立て、杭に縛らんとするを、遮ぎり〳〵。

阿『助けて！、〳〵！、〳〵！。』

獄『ウフヽ、ソハヽハヽ。わりや、いかに救助を呼ばはるとも、三千界に慈悲はなし。此場に杖とも柱とも、神とも佛とも拜まるゝ、われより外には。』

獄『そんなら助けて。』

阿『サヽ、從ふか。』

獄『サア。』

阿『サヽ、殺されたいか。』

獄『サア。』

阿『ウヽ、煩瑣い！、ウリヤ下衆、括れ縛れ！。』

列『はッ。』

獄『はッ。』

杭に縛る。

獄『ウヽヽ、そんなら……。』

獄『獄れ！。』

獄『八釜敷い！。』

獄『シ、從ひまする。』

太子玉座に復す。

阿『ウリヤ、時節は過ぎたるぞ、從ひまする！。嬲られ居るとは食知らずに、見るも、觸るも穢はしい、わいら如きに戀慕の蜂の頭のと、言ひ寄る阿閣世と、思ふか、狂女！、不敬至極！。下衆！。兩人を撲て！撲て！。』

獄『はッ、はッ。』

撲つ。

悲鳴す。

阿『ハヽハヽ。見苦しき二人の面、愉快ぢや、愉快ぢや、酌をせい。ゲーップ、コリヤ、下衆、其不態なる兩人が唇、憚りない、先づ下郎の方より、針もて上下確かと縫へ！。』

獄『はッ。』

阿『シテ女郎は乳下より、大腹喝破と突裂いて、胎なる赤兒をば掴み出し。シテ

下郎は、両眼を抉り、耳、鼻落し、肋を揺いて、手足を挫け！、舌根を抜け！。』

獄『はッ、はッ。』

先づ男囚の辱を縊ひ始む。悲鳴の聲。

此時上手より、父王の侍臣つか〳〵と出づ。

侍『謹んで言上す、只今御父、大王のたん入り！。』

一座驚き平伏する。こゝに殿上正面の襖を明けて父王頻婆娑羅、夫人韋提希と出づ。

大『阿闍世、その有様は？。』

夫『何事なるか。』

大『阿闍世！。天下賞罰の大權はわれ握れり。汝誰に許されて其庭なる兩人を刑戮なすぞ！。コリヤ、誰に許されしか、語れ、語れ。』

阿『……。』

太『默して居つては相分らぬ。コリヤ、誰が汝に申し付けしか、サ、。』

夫『何時になつても變らぬ性根、其方やれ詫申し上げたがよいぞよ。』

阿『……。』

大『この不所存者めが！控へ居らう！。命の下らん其れ迄は、こりや、謹慎致せ！。』

阿『はッ。』

大『退れ！。』

阿『はッ、はッ。』

太子赤面して(上)へ。宮女恐懼して杯盤を片寄せ(下)へ入る。大王、階下に伏せる判官、獄丁に向ひ。

大『コリヤ、両人の縛を解け。』

獄『はッ、はッ。』

直ちに縄目を解き、大切に勞はる。二人踊躍平伏しつ。

二人『有り難き仕合にござりまする。』

大『両人の者、近う〳〵。』

二人『はッ。』

二四恐る〳〵進む。王、階に臨み、一包を取り出し。

大『迂はす程に、こりや、必ず〳〵末長う、仲よう身體を大切に、よいか。』

二人『はッ。』

唄。はつと計りに氣も卿倒。天に喜び地に喜び。迚る目先も夢幻。夫婦はわッと泣き入り。〳〵。伏し拜み〳〵。御前を退り出にける。

（侍臣、取り次く。）

両人只泣いて伏拜み〳〵、判官獄丁と下手に這入る。大王二人の侍臣に對ひ。

大『他に未だ、太子の爲に不幸に淪む、者も數多にこれあるならん。こりや、卿等直ちに獄に赴き、赦免の旨を申し傳へ、夫々手當等ぬからざる樣、相頼む。』

侍『はッ。はッ。』

侍臣二人、上手へ這入る。夜鳥の聲。

大『のう韋提、われ其昔子なきを憂へ、阿毘蘭山の山陰に、無益の殺生。』

夫『非業の最期。』

大『テモ、恐ろしい。』

父王悸として夫人と顏を見合せ。

二人『ものぢやわいのう。』

大『さは去りと、過ぎたる事は致し方なし、去ればとて、此儘にも打捨て難く。ハテ困つた事ではある。これといふのも結局は身から出でたる錆、誰をか恨みん。御山の聖の御異見も、渠が耳には馬に念佛。それはそうと、ハテ、此儘に、若し捨て置かば、後日の不爲、いざ、これより殿しくトクト。』

夫『申し聞かせて遣りませうわいの。さは去り乍ら、若や、コリャ、ひよんな事にも……。』

大『なり兼ねまじき相師の一言。』

夫『懷胎なせし折柄に。』

大『生るゝ御子は太子なれども、生れ給はゞ必ずわれに、損ある由、申せしが、惡い事は、ハテ出來ぬ。』

二人『ものぢやわいのう。』

二人顏を見合せる處にて道具廻る。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

(二) 修道林

登場人物

釋尊の弟子阿難

同舍利弗

阿難の兄提婆々羅門

＊　＊　＊　＊　＊　＊

こゝは鷲峯の西の麓、閑寂たる林にて、稍上手の樹下石上に蚓を敢き端坐する阿難默然として入定し居る。全景熱帶國、修道林、清涼の地。(風の音にて明〳〵。)茲に花道より阿兄提婆〻羅門、例の行乞の姿にて出づ、よき處にて。

提婆『兎や角と、うのれ詞を左右に托し、吾にのみ五通の法を許さゞるは、はて、腑の小さい奴原よな。好矣、好矣、是より阿難は弟、他心徹鑒の通力ないを幸に、巧く欺瞞して五通を學び、細工は粒々仕上の仇、ウフ、立派に返して目に物を、見せて呉れんづ、たゝ、左様ぢや、〳〵。』

唄。左様ぢやと許り歩みよる。何思ひけむ兄提婆。喝破と打伏し泣き給ふ。

下手にて提婆阿難を見るや杖、鉢を地に擲ち、胸を拍ち、頭をむしり衣を裂き、身を大地に投げて、號哭す。

唄。良、暫あつて御涙を打拂ひ。〳〵。慇懃に手をつき。面を上げ。

提婆、頭を擧げ、阿難の前に両手をつき、涙を拂ふ。

提『アヽ、吾ながら誤てり！誤てり、！。今は何をか隱し申さん。今が、今まで、卿を種に、世尊を害し奉らんと。』

(あとは涙聲)

提婆『巧みし提婆！、この惡心！。何故に、大地は、…この儘に！、裂けて、…墮獄をさせませぬぞ！。怖ろしい惡人でありました！。今日迄の惡業非道！、助かる法も在さば、尊者！、何卒救を垂れて下されい。』

阿難、入定より出で両眼を活と睜く。

阿難『兄上。』

提婆『は。』

阿難『スリヤ愈々前非を悔ゐて。』

提婆『卿と同じく正道に。』

阿『返らせ給ふか。』

提『ば。』

阿『スリヤ愈々！。』

提『助けて下さるか！。』

阿『ホ、兄さへ前非を悔ゐなば。』

提『スリヤ我僧の様なる悪人でも！。はて廣大もない、有り難いことにぞあい
まする、何を言ふにも、卿が知つての通り是迄に、作したる罪の數々は、海とや
云はん、山とや云はん。』

阿『罪を罪とも辨へ居らぬ顚倒の、この世の中に罪が知られて罪と知る是ぞ
眞の智慧第一。』

提『た讃の詞は却つて耻かし、いやはや、恐かな提婆にごありまする。』

阿『善哉、兄上、斯くありてこそ智慧者の一人。』

提『宿世の因緣淺からで。』

阿『御身は阿兄と。』

提『われは尊者を弟に。』

阿『生れ合せて居り乍ら、末は仇と現世から別々となるとかと。』

提『いかにも、〳〵、其といふも、此といふも、悉この提婆が惡心ゆへに。恐れ入り
ましてごありまする。』

阿『不、兄上、これ亦宿世の約束ならん。惡の中より善來らず。善の中より惡來ら
ず。いかに微細に分析するも、善の中には惡は無く、惡の中には善は無し。さす
れば今の惡報も、これ皆吾身の業報と思へば、更々苦しからざれど、心に懸る
は、御身が行末……。』

提『はッ。忝し。思へば、實に極惡非道の徒者！。卿を弟に、持ち得ました計り
に、鬼が轉じて佛とは、いやも夢の様なと心地致し、た嬉しう存じ奉る。』

阿『サ、その夢の様なる心地致すは誰も彼も同じこと。』

提『無明長夜の闇はれて、眞如の覺月あざやかに。』

阿『夢覺めぬれば夢ならず。』

提『大般涅槃の。』

阿『城は常住。』

提『死生を離れ、苦樂を脫する。』

阿『國に遊んで。』
提『无量永劫。』
阿『サヽ諸共に。』
提『樂まむ。』
阿『兄よ。』
提『ば。』
阿『われも是にて安堵致せり、世尊もし、聞召さば如何計かり御滿足。』
提『いや、さて、我ながら愛憎の盡きたるこの提婆、何を隠さんわれ其むかし一婦人の爲に世尊に對し、石らぬ恨をかけ奉り、この難行も彼故と、一日も忘るゝ隙とてはなかりしが、偖く想へば、彼も、此も、夢の戯！汝やれ耶輸陀羅を捨てしはわれへの繕ひ、ろの證には今は御弟子に引入れてと、さゝ、卿の前なれど思ひ癒めて、この歳月！。さて〳〵思かな。これと申すも、みな疑惑の。』
阿『サヽ、其疑が迷の本。』
提『たゝさ、げに佛陀の境涯は、三明六通、無碍自在、自在無碍なる六通の、中にも勝れた？、他心通凡夫の心は掌を、見るに均しき通力あらば、疑ひどうても疑はれぬ、道理もあれど、今の悲しさ。』
阿『兄上。』
提『はッ。』
阿『その通力も修行次第、證果進まば五通六通、心の儘に得られまする。』
提『メリヤ凡夫でも！。』
阿『五通は許せど第六の、宿命智・見の通力なし。』

婆提『スリャ五通の法は凡夫でも！。』
難阿『順序を亂さず、法則に、據らば獲ること難からず。シテ卿は？。』
婆提『いや、獲たいとも今思はず、されば とて、獲たく無いとは思はざれど、五通は右も左、第六の、宿命智見の通力をば。』
難阿『ハヽ、汗は、兄上、大聖の御位にあらざれば得るを難し。』
婆提『然らば切めて、五通の法なと、善き折あらば、次第に學んで、如法に修しなばたろかなる、この阿兄めにも、幾分なりと、得られまするでごありませうか。』
難阿『いかにも。』
婆提『ずりや、得らるゝとな、忝なし、然らば其を樂みに。之れと申すも菩提の利益今日からは佛道の師匠に卿を頼みまする。さすれば、向後は、兄と言はずに名を呼び召されて、提婆々々と仰せあるやう、此儀は分けて、御斷り申上げ置きまする。はて、是は、ハヽ、拾はぬ金の分配に、可惜御修道の妨げいたし、申譯なき段許され度し。イヤハヤ、斯くなるからは身も安穩、心も安穩。過ぎたる跡を見返れば、日々夜々の惱亂は、炎の中で何萬劫、これぞ世にいふ地獄かと、思へば身毛も竪つ計りにごありまする！。さるを今卿に遇ふて、身心ともに清涼

の、風に吹かれて甦へる、草木でさへも花を咲かせて果も結ぶ。さすれば惡な提婆めも、何時かは菩提の花を咲かせて、成佛の果を結ぶ日も、これあらんかと存じますれば、今は早これは、これはと許り、唯呆れて居りまする。』
難阿『イヤ、失禮ながら御見上げ申す御心底、然らば之より同道なし。』
婆提『御山へとな！。』
難阿『たゝさ。』
婆提『サヽ、其儀は平に御免蒙むる、イヤサ、御免蒙らねばならぬこの提婆、今さら何の面下げて、參られませう。』
難阿『不、不、兄上。』
婆提『いやさ、いやさ、卿の言葉に相違はなけれど、此提婆めは恥かしうて〳〵合す顏がごあらぬ故、この儀は平に、御見逃し下されい。シテ御身は、世尊の御弟子、われは今日より尊者の弟子、さすれば世尊の又弟子と、成らせて頂く不思議の緣、イヤモ、是にて十分滿足。』
難阿『兄上よ。』
婆提『は？。』

阿難『われは弟子なり、師に非ず、されば御身の師匠には、御山の世尊を頼まれよ。』

提婆『イヤモ、其には及ぶまじとも存じますれど、たゝいやさ、其儀は卿に御任せ申さん、いや、恐れ有り、〳〵。』

阿難『然らば是より……。』

阿難、座より下り、樹に懸けたる錫杖を取る。提婆、慌てゝ。

提婆『その儀は平に。』

阿難『御辭退なるか。』

提婆『イヤサ、辭退は更々申さゝれど、卿も見らるゝ如く、斯る婆羅門の妻にては、太甚ろの恐れ有り。シテ佛道には、唯今入りし許りの者にて、至つて未熟の身の上、故、是より卿の蔡陶にて、熟達なせし上ならでは、迚も御山へは登られぬ。日來の悪行、現際の報後に悔ゆとも何ぞ及ばん。數へて見れば二昔、舊王舍城の門外にて、イヤサ、卿より「悪は必ず成就せず」と、言はれし事が面り、かくもあるものかと思へば、イヤハヤ慙愧の至り。われ其むかし世尊に逼り奉り、出家授戒を乞ひたれ共、許し給はねば、仕樣事なしに、餘人を頼み、授戒出家は遂げたりしも、肝心の心が出家いたさず、妻はいかに如法なりとも、心の裡は餓鬼畜生修羅地獄、イヤモ、六道輪廻の有樣は、あり〳〵と見ましたでごあります。』

阿難『ヲヽサ、兄上、悪は延せ善は急げ、いざ、〳〵參らん。』

提婆『アイヤサ、只今も申せし如く、妻許りの出家では、世尊に對し奉り、申譯がございませぬ、佛道修行の功積り、神通力の一つでも……。』

阿難『さゝ、其が頓倒の我見。』

提婆『イヤサ、この提婆めの心では、日頃の悪行が無いのならよけれ共、それに妻はいかに、立派でも、肝心心が調はぬ其までは、卿の許にて最も厳しく、苛てゝ貰ふた上ならでは、參り悪うてなりませぬ、と申すも外では無し、確しい上にも確しくする、この提婆めが愚痴ゆへに、思の有り丈け申上げまするのでございます。』

阿難『イヤ固より、強ふるは道に非ざれば、登山の一儀は、貴意に任さん。』

阿難、石上に腰を懸ける。提婆、安堵の顏付。

提婆『はッ、はッ實にハヤ、出家の功德は廣大無邊、ろの御出家のた仲間に、この提婆めが入るのちやと、思へば、何やら、涙が溢れて、なりませぬ。形は出家を遂げましても、心は在家のものよりも劣り果てたる根性では、詮ない事と存じま

する、されば世尊の金口にも。』

提婆苦しき咳を幾つもする。阿難默然。

提婆『在家に對して出家の功德、說きたまひしを今に忘れず。』

阿難『汝は兄上、何れの頃に聽れしぞ。』

提婆『さア其は、成道最初三七日、かの華嚴の會坐にて。』

阿難『すりや、華嚴の會坐とな、世尊成道の日に吾生れ、御弟子となりしはこの阿難が、二十五歲の春なれば、吾その時居らぬも道理、さすればわれ其頃は襁褓の裡にて。』

提婆『たゝさ、其時かの會坐にて、われ世尊より面り、拜聽せしを吾語らん。』

阿難『サ、其說は。』

提婆『よッく聽かれよ。在家は無量の過あれども、出家は無量功德を成す。在家は恒に神騷げど、出家は常に閑靜なり。在家は淨命を得ること難く、出家は淨命を得ること易し。在家は怨賊多けれど、出家は惱亂あること無し。在家は是憂處、出家は是喜處、在家は是惡道の

門、出家は是利益の門。在家は繫縛、出家は解脫。在家は則ち狹りに怖る。出家は則ち畏なし。在家は鞭杖を要すれども、出家は是等のもの要らず。在家は刀劍を帶す、出家は則ち之を帶せず。在家は多く求むるが故に苦也。出家は求むること無きが故に樂也。在家は則ち戲調、出家は則ち寂滅。在家は是惱む可し、出家は惱むべきこと無し。在家は則ち愁瘁し、出家は則ち愁瘁無し。在家は心燃ゆるが如し、出家は則ち寂靜也。在家は少勢力、出家は多勢力。在家は垢門に隨順し、出家は淨門に隨順す。在家は其心荊棘の如く、出家は時々刻々その棘を去る。在家は小法を成就し、出家は大法を成就す。在家は不善を行ずれ共、出家は則ち善を修す。在家は後に悔あれども、出家は則ち悔ゆること莫し。在家は諸佛辟支佛聲聞の爲に賤められ、出家は諸佛辟支佛の爲に稱讃せらる。在家は則ち足るを知らず、出家は則ち足るを知る。在家は魔の喜ぶ處にして、出家は魔の憂ふる處也。在家は後に衰患あり、出家は後に衰患なし。在家は則ち破れ易く、出家は則ち破れ難し。在家は永く生死にあり、出家は則ち究竟涅槃、在家は惡魔を降服すること能はず、出家は能く惡魔を降服す。在家は則ち傲岸、出家は則ち謙讓。在家は則ち鄙劣、出家は則ち尊貴。在家は多くの憂あり、出家は

則ち毒多し。在家は箭の身に在るが如く、出家は身此箭より離るゝが如し。在家は則ち疾あり、出家は則ち疾癒ゆ。在家は惡法を行ずるが故に速に老ゆ、出家は善法を行ずるが故に少壯なり。在家は雜毒の藥を飲み、出家は甘露の藥を飲む。在家は毒樹の果の如く、出家は甘露の如し。在家は則ち怨憎和合し、出家は則ち愛別離の苦みあり、出家は則ち親愛和合す。在家は則ち恐痴重く、出家は則ち恐痴輕し。在家は則ち救はれず、出家は則ち救はるゝ。在家は則ち罪といふ罪會れども、出家は則ち福會る。在家は是れ多瞋、出家は是れ多慈。在家は則ち淨あり、出家は則ち淨なし。在家は是我慢、出家は慢なし。在家は財物を貴べども、出家は則ち功德を貴ぶ。ろれ在家には災害あり、出家には災害なし。在家たること易けれど、出家は則ち遭ひ難く、千萬劫中、乃一たび之を得ん。汝等、在家は行じ易けれ共、出家は則ち行じ難し。在家は世俗の流に從ひ、出家は則ち俗に逆ふ。在家はこの流に漂へども出家は則ち筏に乘ず。それ在家は煩惱の爲に溺らさる、出家は則ち橋梁あつて自ら渡る。なんたち、在家は是この岸、出家は是彼岸なり。それ在家は官の法に隨ひ、出家は佛の法に隨ふ。是故に在家は苦果あり、出家は樂果。在家は則ち輕躁なり、出家は則ち威重し。在家の伴は得ると易かるべし、出家の伴は得ると難し。在家は婦を以て伴と爲し、出家は堅心を伴と爲す。在家は則ち圍に入るが如し、出家は則ち圍を解くが如し。在家は則ち他を侵害するを以て貴しとなす。イヤモ是嗟ではごあらぬ。』

提婆『御満悦かナ。』

離垢『思ひもよらぬ兄上より、聽きつる法は利益末代、今の世尊の金口にも、在家の伴は得ると易く、出家の伴は得ること難しと、さァ其に違は無しのう、兄上。』

提婆『はッ。』

離垢『われ聞く、御身は其むかし、淸淨に戒を持つこと、十有二年。』

提婆『はッ。』

離垢『既に六萬の法藏を誦し、其堪能と云ひ、器量と云ひ、佛法大海の水を容るゝに堪ねたる御身、かくなるからは、爲法不爲身、大法傳持の法將と。』

提婆『いやモ、愚かなる上、無能なる、この提婆めをかく迄に。』

離垢『兄上！。』

婆提『尊者！。』
難阿『頼み力に。』
婆提『なしたまはるか、すりや、はゝッこは忝し、慙愧至極。』
難阿『シテ兄上。御身が俄かに前非を悔ゐて、かく佛道に入られしには。』
婆提『サヽ其由來を。』
難阿『語られよ。』
婆提『は、はッ。能くぞ御尋ね下されし、と申すは餘の儀に非ず、われ昨日圖らずも、王舍城を過ぎつるに、ろの途にて面り、世にも稀なる不思議に遭へり。』
難阿『シテ如何な？。』
婆提『さア其不思議と申すは、我が行手にて、ワッワッといふ閧の聲、揚るよと見る間に砂烟、素破不意の軍の寄せたるかと、出家の身の我を忘れて勇み立ち、屹と見やれば群集の波、颯と此方へ蛛の子と散り亂れたる跡見れば、こは抑もいかに何時の隙に、生へたか、湧いたか、眞黒な、大きな山が市中に動くワ。』
難阿『む、シテ其山は。』
婆提『たゝさ、其黒き山と見ねしは大象にて、世尊を害し奉らん爲、阿闍世太子が

放ちし醉象、譬へば天より垂るゝ雲の如く、盤石の耳、振立て、劍の牙怒らし、其吼ゆるは雷にも似たるが、時恰も彼方より、徐々此方へ歩ませ給ふ、世尊を目懸けて飛躍一番、スハ隱れたるよと見る間に、今の大象、頭を低れて、軀を圓く耳を垂らして、鼻を打振る有樣は、飼養の猫に異らず、一聲高く悲鳴を揚げ、畜生ながら三度迄、禮拜なせる彼方に世尊、莞爾と微笑み立たせ給ふを、見たる提婆が日來の惡心、氷と解けてハヽア、感心な、いや成程此處ぢや、こゝの處ぢやト、横手を拍ッて恐入り、奉るの外はごありませなんだ。亂心の大象、畜生でさへ此通、降服あるには何か是には、仔細なうては叶ぬ事、四十餘年の其むかしから、イヤサ、只の一度でも、怒るの腹を立るのと、申す御事ましまさず、是にはテッキリ異ッた、大能が無うては出來ざる業と、是には殆ど恐入る、外はごあらぬ其折しも、今申す醉象の、歸伏の狀を見し提婆。イヤモ、我も何もかも、折れて仕舞ふて今日の懺悔、由來と申すは、ヘゝこの次第！。』
難阿『ハヽハヽ、善哉兄上、悔ゆる心を本として、已後は愈々正しき道へ。』
婆提『は。』
難阿『いざ諸共に。』

提『御供致し。』
阿難『手を曳き合ふて。』
提『叅るで御座らう。さはさりと、打つて變つた、昨日今日、何が何やら(四邊を見廻し)相分らず、實は昨日、ろの足にて、自遂尊者の御座所を訪ね、この旨トクと聞わ上げ、佛道には初心の提婆、何卒入道の作法をと、懇望に及びし處、彼の壷には、まづ四念處を學べよとて、即坐に教へて下されし故、自らかく申し上ぐるは憚りあれど昨夜の中に皆な成就し。』
阿難『すりや兄上には四念處を。』
提『たゝ如何にも。』
阿難『一夜の中に?。』
提『如何にも!。』
阿難『ホゝゥ、てもさッても兄上は上根上機、この分にて進ませ給はゞ世尊の、必定大弟子と。』
提『いや、その御詞にて赤面致す、去り乍ら、四念處を修し了りなば其次は、如何なる法をか、行ずべき。』

阿難『兄上。』
提『はゝ。』
阿難『四念處を修し己りたる後に修すべきは、四正勤の道法にて、其第三は四如意足と、すべて三十七科の道品をば、修して始めて羅漢の證、さすれば兄上。』
提『はッ。』
阿難『御身が是より修すべきは、四正勤の道法なれど、其昔六萬の法藏を諳し、四念處觀も一夜の中に、成就ありたる利根の御身、この後とても御油斷なくば。』
提『アイヤサ。』
阿難『サゝ、證の岸は近づいたり。』
提『はゝはッ。御懇なる御策勵、一々肝に銘じまする、斯なるからは此提婆めも及ばず乍ら駑馬に鞭ち、尊者の御供仕らん。したが四念處、四正勤と、三十七科の道品を修し了りたる曉には、いかばかりか、樂しきものでがな、ごあらうの。』
阿難『さゝ、羅漢の證は三明六通、具八解脱も死碍自在。』
提『自在無碍なる神通を。』
阿難『世に現はして、煩惱の。』

婆提『林に遊んで、無量永劫。』
難阿『生死の間にて。』
婆提『濟度利生の利益三昧。』
難阿『種々なる善巧。』
婆提『サヽその方便道具に使ふ神通をば、われにも許して。』
難阿『すりや神通を。』
婆提『たゝさ、如何にも、これまた布教傳道の。』
難阿『手段に。』
婆提『許しッ賜はらば。』
難阿『むゝ。』
婆提『いかばかりか本懐至極。』
難阿『むゝ、いや此事いと易し、さはさり乍ら此法は、古より事法として秘密の禁制師資相傳、容易には傳へまじき要法なれど、大法流傳のこれも報謝と、思へば、イヤサ、思へば。』
婆提『許して。』

難阿『さゝ。』
婆提『賜はるか。』
難阿『サヽ。』
婆提『むゝサヽ、許して下さるか。』
難阿『サヽ、かくなるからは、許して敎へて、進げもしやうが、のう兄上。』
婆提『はッ。』
難阿『必ず之を、惡法に。』
婆提『提婆が使ふと、ウフヽ、ハヽ、ハヽいやも其た氣遣は嘗ッて無い、して先その秘密なる(小聲にて)修法とは？。』
この時、山上かすかに盤木の聲聞ゆ。
唄。折柄響く山上の大衆を集むる盤木の音。阿、難はッと起ち上る。袖引留めて。提婆はたろ〳〵。
婆提『いや、且く！。ま、ま、待ッて下され。御急ぎの程は左も有らんかなれど折角是迄、イヤサ、これ程に。』
難阿『ろは又明日にも。』

婆提『延やうと！。でも是は御出家にも似合ひ玉はぬ御詞かな。明日が明日とて當にはならぬ、無常の命と、御存じあらざる儀はよもあるまい。』

難阿『さゝ。』

婆提『衆生が眞實、愛可くば。』

難阿『サゝ。』

婆提『片時たりとも御猶豫ならじと、サろの御樣子はこの兄を、試みんとの御身振りか。』

難阿『たゝ、イヤ左に非ず、御身が乞はるゝ修法の如きは、一日延ばすも大事あるまじ。』

婆提『イヤ、すりや早や愈々以て奇怪千萬！。尊者もわれも斯くなる上は、一切衆生は赤兒の如し、化益の方便一日延なば一日丈け、見す〳〵衆生を惡道へ、墮るにやならぬト思へばこそ、斯く無理なる御願を、知ッてか、知らずか、よもや知り玉はざると有るまじ。さゝ、唯今修法を、許して、授けて下さらずや。』

難阿『さらば兄上。』

婆提『はッ。』

難阿『彼なる樹蔭へ。』

婆提『はッ。參るで御座りまする。』

提婆、下手の樹蔭に坐を占むる。阿難あたりを伺ひ、人莫きを見濟ましし、近づいて坐し、提婆に向ふ。

難阿『われ今修法を一々授けん、いざ、教ふる儘に、行はれよ。』

婆提『は、はッ。』

難阿『先ろの心を最淨かに持たれよ。』

婆提『はッ。』

難阿『して其散亂動を廢めて、一ッ處に心を集めて、是また靜かに。』

婆提『はッ。』

難阿『シテ其次には、斯くの如く。』

阿難、地に坐し、身を以て提婆に教ふ。

難阿『まづ右の脚を左の股の上に著け、かく外と齊くなせ。』

阿難教ふ。提婆學ぶ。

難阿『して其次は、左の脚を右の股の上に安んじ、前の如くに外と平らに、斯く齊

しくなし。』

教ふ。學ぶ。

雖阿『両足の安排、已に終りたる其の後は、ろの左の手をば斯く、右の手の上に安じ。』

教ふ。學ぶ。

雖阿『さて其の次は、かく軀を正しく、何面より見るとも曲らざる樣、眞直に。』

教ふ。學ぶ。

雖阿『してろの口は、かく上下の唇を、合はせて開かず、堅からず、齒は上下を近づけしむると勿れ。して其舌はかく下より上顎を柱へ、これまた自然に舌端の、顎に觸るゝを忘るゝやう。』

教ふ。學ぶ。

雖阿『して其次には、かく両の目を半眼に、開くに非ず、閉づるに非ず、正面身を距る三尺の、手前の處を相見られよ。』

提婆『シテ其次は。』

雖阿『さゝ其次は數息觀。息を數へて定に入る、これ卽ち三世の諸佛、如來入道の

初門なるが、今迄申せし參禪の用意、入定の作法、毫も崩さず調へ了りたる其後にて、この數息觀をば修するなれど、ろの息を數ふるには見られよ、かくぞ。』

教ふ。學ぶ。

雖阿『いやさ、兄上。わが言ふ息とは、左樣に荒々しき息には非ず、見られよ、かくぞ。』

提婆『たゝ分ッた、然らば斯う。』

雖阿『イヤまだ荒し。』

提婆『然らば。』

雖阿『イヤまだ高し。ろの樣に他に聞こえては相成らず、自分の耳にも微かなる程にて重々。して凡ろ、息には四種の區別あるは、御邊も定めし承知ならんか。』

提婆『いゝや、未だ。』

雖阿『然らば語らん、先第一に。息の聲あるを風と云ひ、之を守れば則ち散ず、散ずるものは定に適せず。二つには、息の結ぼれ滯るを氣と曰ひ、之を守れば則ち結ず、結するものは定に適せず。三つには息の出入急にして盡ざるを喘と曰ひ、之を守れば則ち勞す、勞するものは定に適せず。その第四には、聲あらず滯らず、出入ともに十分なるを息と曰ひ、之を守れば則ち入定。』

提『いや、成程。さすれば息は定の入口。シテ此息を数へるとは。』

雅阿『心の中にて、一より十に至る迄、ひーふーみーよーいーむーと、十に至らば又本の、一より初めて十迄数へ、かく爲ること度を重ねてなす時は、この心は自ら、一ッ處に聚らん。この時心外に萬象なく、見んとせざれば見れ共見ねず聽かんとせざれば聽け共聽ねず、心海やうやく波靜かに、寂然不動。身は次第に輕く、心は明鋭の如し。この時兄上、心を以て身を擧げ、この身動くと想はれよ。』

提『すりや、心を以て身を擧げて、わが身動くの想をなせとな。』

雅阿『いかにも。』

提『シテ其後は。』

雅阿『この想成じ已りなば、この身次第に地を離るゝ一分、二分、三分、四分、五分、六分、七分、八分、九分、一寸の想成じなば、其の次は一尺、一丈に至ると想ひ合上に至つて空無碍の想成じなば、直ちに昇つて空中に至ると想はれよ。この時また次第々々に、わが身を擧げし其心を、揺めて下り本の座に、還り至ると想はれよ。』

提『して其次は。』

雅阿『さア此度は、身を以て心を擧げ、この心動くに似たりと想ふ可し。』

提『すりや、今度は身を以て心を擧げ、わが心動くと想へど、宜ふか。』

雅阿『れゝさ。』

提『シテ其法は。』

雅阿『前の如くに初めの時は、その心地を距るを一分一寸、一尺一丈。身を以て心を擧げ、その心を以て、身を擧ぐるといふ樣に、次第に擧げて、合上より虛空に、至ると想はゞ前の如くに身を携めて、下つて本の座に返へると、想はれよ。』

提『いや、いかにも、いかにも、して其次は。』

雅阿『ザ、其次には、身心合して虛空に擧ぐると想はれよ。』

提『たゝすりや、この身も心も、一味合躰、虛空に擧ぐると。』

雅阿『さゝ其樣に急くことかは。先々靜かにシテ其法は前に變らず、身心合して擧ぐると想ひ、また還へらるゝと一周二周、終りなば復初め、かくすると千度萬度、この想成ずる迄修せよかし。』

提『いや、容易々々、シテ其次は。』

阿難『さあ、身心合學の想成じなば、その次には身も心も、一切物體の中に入り、その硬軟と粗密に論なく、當るに觸れて礙をなし、間へて入るを妨ぐる、例へば木竹石瓦、大地山河に至る迄、身心ともに入るに礙らず、觸れず間へず妨げず出入自在、无礙なりと、想はれよ。』

提婆『いやすりや、木竹石瓦、山河大地に至るまで、身心ともに出入自在、ハヽこりや面白いぞ、面白いぞ、シテ、シテ、其の次は。』

阿難『さあ其次には、山と言はず、河と言はず、大地草本、一切の物體皆悉く、わが身の中に入らしむるに、妨げざること空の如く、是また自在无礙なりと想はせ玉へ。』

提婆『イヤ愉快！。して其次は。』

阿難『次には想へ。この體が、段々と大きうなつて、果は虛空に遍滿なし、坐臥俱に自在にして或は坐し或は臥し、手にて日月を搖り動かすと想はれよ。次には ろの身、段々と小さうなり、果は微塵の中に入るとも、自在无礙なる想を爲せかく爲ること七日七夜、閑寂なる處にて修する時は、身通成就し、化現の術、御身が思の儘ならん。』

提婆『いや、忝ねね、忝ねね、之より直に取懸り、七日七夜に片附けて、本望遂ぐる曉には、仇なるイヤサ仇し世の、退治と出かける濟度利生。』

提婆、塵を拂つて立ち上り錫杖をドンと突いて。

提婆『見ン事魔王の首とらば、轉りと變る夢の世に、凱歌あげた其時は、憚ん乍ら此の提婆が、成等正覺、程近し。いざ暇ンな、仕る。』

提婆花道へ差しかゝる。

阿難『兄上！。』

提婆『何ぢや。』

阿難『今の詞の節々は。』

阿難『通じの悪い唐變木だの。詰らねね事を、言はねねで、最前から急ぐ、山へなと川へなと、居らうと、往なうと、勝手に召されい。』

阿難『すりや兄上は。』

提婆『ハヽハヽヽ、チト下しでも飲んだが善いぞよ。』

花道より這入る阿難思案に沈む。こゝに上手より、有髮の尊者舍利弗、出づ。行裝阿難と同じ。上手よき處にて。

舍利『阿難殿。』

雖阿『たゝ之は舍利弗殿。』

舍利『御邊には何とて斯くは打惑れ、御思案に耽けらせたまふ御樣子、何事なるぞ。』

雖阿『いや、御禮ねを冢り、た耻かしき次第なれど、御邊承知の兄提婆、今し此へ參られていかにも慨悔の色深く、回心の狀を誠と思ひ、欺かるゝとは露知らず、一々秘密神通の法を授けたるに、打つて變つた今の身振り。』

舍利『や、や、や、すりや、その秘法を授けしとな。』

阿『サ、いかにも。』

舍利弗たもはず進みよる。

舍利『さゝ、その秘法を許すといふ御事ある可らず、うむ、仕舞つたり、遲れたり、シタガ今では詮方なし、渠さいつ頃某を、訪ねて參り神通を是非許せと申せし故、人若し道をかく學せんとならば、先づ四念處を學べよと、列ねつけられて餘處の御弟子を歷訪なし、同じく其秘法を許せと請ひたれ共、五百の御弟子の其中にて、一人たり共これを許せしものは無かりしが、さては御邊が肉身の、弟君なるを幸ひに。』

雖阿『スリヤ、御邊の許にも、訪ねて參り。』

舍利『されば サ。』

雖阿『シテ、五百の御弟子を一々と。』

舍利『れゝさ。』

雖阿『すりや某を……、うゝむ最後にわれを欺きなし。』

舍利『いや、阿難殿、こりや完く此許の手拔かり、某さへ一寸御身に此事を、耳打ちせざるが舍利弗の。』

雖阿『いや、いや、さに非ず、こは全くわが身の落度。』

舍利『そは、とまれかくまれ、われら急いで登山なし。』

雖阿『事の始終を。』

舍利『いざ。』

雖阿『いざ。』

取り急ぎたる躰にて、二聖出立の處にて。

阿舍『參らん。』

顔を見合せ、梵鐘の音にて引幕。

第六齣

南殿

登場人物

阿闍世太子

斥候の使臣羅含

其他近侍、近臣、美姫、伶人多勢

提婆

正面緑樹の中奥まりたる處に涼しげなる一宮殿あり、壯麗を極む、中に太子座し酒を汲む、左右には近侍の美童二人、一人は酒を薦め一人は紈扇にて扇ぎ居る。殿の左右は凡て白堊の塀。

上手樹の下に伶人四人、座して梵樂を奏し、下手に華美なる輕羅を著けたる舞姫七人、同じく座して『滿月の夜』を歌ふ。

今や美姫一人、舞臺正面に現はれて舞ひ、階下には近臣叅々、伍々、

能を崩してやんやと囃す。
笛太鼓の音にて明く。
唄。歌ものどかや。滿月の。夜の一曲。まひ納めて。靜々と坐に直れば彼方より。尻候の使臣急々と。遥に伏して畏り。
舞姫坐に復し、樂己む。
上手より赤面の使臣羅含出で來り、恭しく畏る。
羅含『恐れ乍ら申し上げまする。唯今羅含彼處(後を指す)へ參り、蛾一匹たり共見遁すまじき眼力にて、遠近と見廻して候へしが、ハテ、御苑の裏は眞に寂々、この南殿は娑婆の外なる別天地。若や御父帝(小聲にて)より、廻しの犬の其處らに、鼻蠢かして徘徊き居らば血祭にと、腰なる一刀鯉口濕して窺ひしが、人ッ子一人相見ね申さず。四の御門には豫てより警護の番兵、尚臣より、厩へは夫々見張の役、殿重に申し附け置き候へば、たとひ釋迦たり共、此處へはよもや、參られまじう存じ奉れば、れ太子樣には何卒、御心置きなう御榮華の程、懇望したてまつる。』
太子『やあ、釋迦で氣が付いたッ、母は城か？。』

羅含『エ、恐れ乍ら申し上げまするでござりまする、未熟なる臣、ねゝ母ごは。』
太子、盃を口にし乍ら、ヂロリと見て。
太子『婆々よ。』
羅含『エ、恐れ乍ら、婆々とやら、仰せあるは。』
太子『ドヂ！阿母だ。』
羅含『あン成程、イヤァ成穴、ヤサ尻穴イヤ〳〵以てどんぐり目の眼の玉……。』
太子『ハ、ハ、何を申す、面白い臣。ちと參れ。』
羅含『はッ、はッ。』
太子『こりや、注げ〳〵。』
侍『はッ。』
近侍階を下り、羅含に注いで坐に還る。
羅含『之は、之は、有り難き御盃、光榮身に餘り、斯くの如く。』
酒にて瞼を濕し、涙聲にて。
羅含『感泣仕る！。』
太子『ハ、ハ、其方は泣上口と見ゆるは、いや泣くも一盞、面白い、泣け、〳〵』

含羅『ば、はッ。』

太子『こりや、今視れば其方は、酒にて瞼を濕し居りしは、ありや、何の爲めぢや。』

含羅『はッ。御下問蒙り、斯くの如く、赤面至極に存じ奉れど、實は臣が親なるもの大の酒好にて、已らに輪をかけた、底抜の飲みの野郎が欲しいものだとあッて夫婚德利と考へ、チビリ、グビリと產み落されたが、斯く申すどんだくれ。盛の上を杯洗の、チョコ〳〵と歩く時代が先一升、其より二升三升四升、後生大事と親馬鹿が、くれた身代も大無しに、滅つて飲んで五斗腹の三錢。いまぢやァ願も望も何にもありやアしねね、一生飲んで飲んで飲み死に、ごねッたら四斗樽へ挾ッ込んで、戒名はへいれけ菩大愚らろれろ居士、ェヘン莫迦の引導で、淸淨潔白となる臣ゆへ、いやさ、此口計りへ、馳走致しまするは殘念と、ツイ目の玉へ、へへ一口。』

太子『ハ、ハ、面白い奴、シテ其方泣聲を發せしは。』

含羅『ハ、恐れ乍ら、實は目の玉へ先生を運びまするとて、劇しく泌みて痛みを生じ。』

太子『ぶッ。』

含羅『剛勇無双の臣、イヤハヤ耐ね難く。』

太子『ハ、、何處までも扨目の無ね、稀珍な、野郎だの。いや愛い奴、こりや注いでやれ、〳〵。』

侍近『はッ。』

近侍階を下り注ぐ、羅含恭悅の體にて。

含羅『ば、はッ。』

と恭しく大盃を受けつ。

含羅『やあ、これは大酒好、なにさ此大盃にて斯く波々と。』

首を打ち振り〳〵謠ひ出す音曲入る。

(四海波靜かに。吹く風枝を鳴らさゝる。治まる御代も。)

已下立つて舞ふ。

(散りかゝる。老木の花の蔭だにも。宿りかねたる駒鳥の。朋と離れて憂き思ひ。明暮郷を思ふらむ。郷は連理の花傳。花に埋れて面白う。春を歌ひて百鳥の。別は遣ふの初にて。散るは開くの兆とや。〳〵)

所作よろしく坐に直る。一坐どッと囃す。

太子『いや、其方。ハヽハヽ、わりや甘ねの。が併し今の諸に、散るは開くの兆とやら、ハヽハヽヽ、言ふた、言ふた、うゝ能う言ふた！、能う吐いた！。伸びんと欲すればこそ先大に屈する阿闍世！、われ、若天が下に君臨なさば後は身が思ひの存分、火を放つて此世界を焼き塊つか、但しは永久の樂園と、するもせざるも此胸一つ。ウフ、ハヽ、ワッハヽヽ、いや、愛い奴、愛い奴。』

含羞『ば、はッ。やん事なき只今の御諚イヤハヤ斯くありてこそ天が下、御代治めすに足る御器量。げに栂極は二葉より香しとやら、いやも、恐れ入る儀に存じ奉る、男兒生れて難に處す、固より其分にては候へど、事に當つて挫げざるものは唯の一人も御座らぬ其中に。御上に置せられては、僅かの御事より、御父王より御不興を蒙りたまひ、今では閉門、謹慎の御身、何から何まで御不自由勝ちにて渡らせたまふ御事ならんと、恐れ乍ら臣拜察し奉る處、御上に於かせられては、御元氣益々御盛んに渡らせられ、麗しき龍顔を、拜したてまつり。』

同一『われら如何許りか、御嬉しう存じ奉る。』

太子『やあ、滅入つた、滅入つた。其樣な事は何うでもよい。ア、是は、何うやら睡眠を催し、ア、是は、ヲヽ、何うも、眠いぞ、〳〵。あッ、うりや、ヲヽ、者共よ、陽氣に、やあ眠い、や、やれ！。さ、宛ら、五體、しし、しびれて……。』

この時、一坐忽ち催眠の狀を呈し、種々たまりかぬる態を演じ、太子曲几に眠り、一同坐に眠る。

天に音樂聞ゆ。

良久しあつて、木にて一同はッと覺める。太子目を睜らき。

太子『やあ！。』

同一『やあ、やあ、〳〵、〳〵。』

太子『ハテ、今のは夢で有つたかナア。』

含羞『すりや、われらも何とはなく。』

太子『頻りに睡氣を催ふし。』

含羞『こゝにて遂トロ〳〵と。』

太子『まどろむ中に。』

同一『蹄の音。』

太子『すりや汝等も蹄の音！。』

含羞『はッ、御意に。』

同一『ございまする。』
太子『やア、怪しからぬ。今のを夢とするならば、蹄の音も夢の中に。夢に蹄を聞いたるか、蹄の音に夢さめしか？サ、軍兵ならば此方にも、うりや、見て参れ！。』
羅含『ば、はッ。』

羅含、上手へ這入る。一坐興醒め顔。

太子『ウフ、ハ、ハ、こりやア必定阿母が……其とも者婆が其とは無く、様子を嗅ぎに、参りしよな。何は兎も、有れ、此場の仕儀、棄て置き難し、ウリヤ者共、とッくりと、見て参れ。』
臣近『ば、はッ。』

階下の近臣、一同急ぎ立ち上り、上手入口にて出合頭羅含仆れる。

同一『いかに、いかに。』
羅含『やあ、騒ぎ給ふな、安心！安心！大丈夫この上無し、上々飛切！あッ。』
同一『む、何んな？。』
羅含『息が、あッ、切れる！苦しい！大丈夫請合！水！。』
同一『やあ、如何致した。』

羅含『夢！。』
同一『なる程な。』
羅含『夢々！。』
同一『然らば其趣、申上げたが宜いぞ。』
羅含『よろちい。』

唄（夢だ夢だと田圃を歸りや。）
跨跟立ち上りつゝ、寒いこなし。震へ聲にて。
（醒めてくやしき。玉子酒。）

羅含『へ、ヘックション、ハ、、、、、いや是は。め、酩酊とは申し、ひ、平に御免を！下し置かれまするやう。た、たひよれながら大王様！。今のは、あれは全くの夢！。そ、、れがし、四の御門へ走せ参りし處、奥どころか、馬も人も、さアらに相見ね申さず、四邊は森閑として宛で、き、き、狐につまゝれたるが如くし、暫しは茫然と、立ち盡して候へしが、さてしもあるべき事ならねば、急ぎ、エッサ、急ぎエッサ、と、参じて候、水！。』
太子『ハ、、、偽れたか、愛い奴、盃をつかはせ。』

臣『ばッ。』

大盃をさしつけ、注いで坐に復へる。

含『イヤ是は。ブッ。冷水を斯く波々と、いや清冽玉の如し。エッヘ、、、。ハッハ、、、、。ぐいッと盛りまする。(下を見て)こりやア、時ならねね花模様、斯うして慮から砂まで汲ひ込んで、腹の洗濯、砂磨。あとはさらッと此冷水にて(盃を仰ぐ)五臓六腑を洗ッちまやア、世話ア要らねね。ハ、、。何と各位、そ、それがしのみ、斯く頂戴いたし、相済まん！。何と各位、た一ッ如何でござるな、さゝ一つ、受けた！受けた！。』

近臣甲『アイヤ御同役、た太子様の御前チト嗜まれよ。』

太子『いや、苦しうない。差許す。今日は無礼講だに依つて、苦しうない、騒げ騒げ。』

含『ヤイ、頓間半間腑抜馬鹿！わりや受けねねのなら、この盃を面へ撲ッ付けるぞ！。』

臣甲『よう、恐いぞ、然らば受けやう。』

含『ゝか』(注く。)

臣甲『参つた。』

含『サ、一息にやらかすか、ろれとも命を貰ふか。』

臣甲『や、や、悪戯なせそ。』

含『ヘン、なせそも屁糞もあるもんけい、酒は百樂の長と言ッてな、女と酒は寿命を延ばす、乙に陽氣なものだッ。』

臣甲『いや、併し物には愈じて度があるッ。御邊の如くに度を過ごさるゝと、百樂の長も百毒の長。』

含『何ッ。百毒の長？。こら！、貴様！、百毒の長たア一體何書の中にあるンでね！、吐！大方精神錯亂した、釋迦の嘘語を、ちねッ、情ねね頓珍奇だの。彼奴は狂人だせ。この世の中の大馬鹿三太郎の親玉だ！。ヘン一切顛倒だと吐きやアがる。どッちが顛倒やら譯の分つたものちやねねや。やれ諸行は無常であるのと解り切ッた事だッ、ヘン、何が偉いンだ！、畜生！偉かアねね、馬鹿野郎だ！。』

乙『痛快！。』

臣丙『よう、しッかり。』

含『何でね。』

臣『ハ、、、、向になッて怒りをるッ、御邊承知の通り、身共も釋迦とは大の反對、ろれを言はせ度いが此方の計略、ウフ、ハ、、、先アよいは、さア一ッ。』

羅含『わりやア、この盃を捩りつけたな、よろちい。うむ、よろちい。』

太子『いや、面白い、面白い。シタガ者共。』

同一『ば。』

太子『ばて、氣に懸るは今なる夢。』

同一『ば、は。』

太子『こりやア何ぞ只ならねね事ある前表、とッ、思はるゝ。』

羅含『ば、は。ねゝ恐れ乍ら、一を知つて、十を悟りたまふ御上の御淀は左ること乍ら、何も恐いことは、サ、太子の御身ならずや、誰に氣兼が、要るもので御座りませう。夢は五臟の疲とやら、なに、十分……。』

太子『言ふにや及ぶ、身に於ては、恐いものは天が下に唯の一匹ちありやアしねね、さればといふて今の身の上。チックリ爺が邪魔になり、業の突張ッた阿母が、親の二字を恩に被せ、慾の意見も聞き飽きた、われに對する親切ごかし、油斷のならねね惡婆が失やると、また面倒でならねね故、終氣にかけた今の夢。』

臣『ばッ。御意には御座れど御母后には、チト御不快にて先づ頃より御寢なる由、仄かに承はり候へば。』

羅含『やア、嘘を言ふなれふくろ、イヤサ梟烏の、明るい晝を暗の夜ぢやと、嘸語ぬかす狂人に、恐れ乍ら迷はせ給ひ、御母后には法華經の、あの何やらが有る由にて、驚嶺に詰めかけさせ給へば、御城に御座る筈は無いワ。』

臣『然らば若し、蒼婆大臣、御出あらば。』

羅含『れ太子樣、御病氣なるはト、遂ひ返さんの。』

乙『もし返らざる其時は。』

羅含『れ太子樣の御威光なるは、摘み出して呉れんのみ。』

臣丙『然らば若し、御父帝の御使者として參りたる其時は。』

羅含『御惱重らせ給へば後日に願はん由偽りやらん。』

臣丁『さるにても、騒がしき彼の舞樂はいかに。』

羅含『御慰みに仕るワ。』

臣丁『いや勅使に對して、ぶッ、無禮者めが！。』

羅含『ヤイ、何だと。』

臣『痛ね、撲ちやがッたな！。』

羅含『野郎！。』

と撲り合ひ、遂に本氣になる。人々止める。

羅含『いや、これはね太子様の御前、その憚りなく、狼藉の段。』

臣『恐れ入りたてまつる。』

太子『ハ、、、愛い奴。後顧の憂ひなきからは、モツト陽氣に、やれ。やれね。』

一同『はは、はッ。有り難き御諚、われら忝けなく、然らば是より。』

羅含『舞の一曲。』

太子『仕れ。』

美姫一同ハッと答へて一人宛、舞臺中央に現はれ、替る〴〵舞ふ。

伶人樂を奏す。

唄。時しも天に神變あり。瞻上る虚空に異形の沙門。雙の肩より火を出し。脚の下より水を吹く。太子は之を見そなはし。下臣に對ひ。

太子『天を仰ぎつゝ。

太子『あれ見よ、虚空を見ずや、身の左より水を吐き、又右よりは火を吹く沙門、あ

りや、〳〵、體は大山の如く、なるかと見れば、ありや、〳〵、微塵、坐すわ、臥るわ、はて何者なるか！知らざるや。』

羅含『はッ。いかにも彼方に見ね玉ふは是れ卽はち斛飯王の御子にて、ろの名五天に隱れなき、尊者、提婆太子に御座りまする。』

太子『すりや、智惠者の名も高き、提婆太子、いや此上なき珍客、ホ、、よき處に御出。いざ。請じ申さん。』

と手を揚げて喚ぶ。

太子『尊者、下り給へ。疾々これへ、ゐらせられませ。』

（涼しく微る笛の聲）

唄。空にて提婆は仕澄ましたりと。稚兒と變じて阿闍世の前、一坐はウトウト睡る間に。つか〳〵と近寄れば。

（笛の聲）

一坐、提婆の衾にかけられ睡る。

提婆、美童と化して、太子の膝にのる。

唄。ゐゝやッと抱上げ給ひ。熟々と打成れば。雲の髮。玉の肌。花にも勝る風

情にて。眉の霞は月薫る。野邊は麗と氣も現。天女か、ア、あらぬか、ア、可愛の者よと抱き締め。〳〵。身と動はして煩擦なし。餘りの御事にや。御口をあて給ふ。

太子、愛心極まッて、口中に唾して弄ぶ、兒のむ。

唄。うたてやな。御愛惜に。やゝ久し。美童は太子の御膝を。脱兎の如く身を轉す。春の燕と消わにけり。こはろもいかにと愕く目先へ。本性顯はす提婆ガ羅門。

早替り。元の提婆となりて殿上に現はる。(價十萬兩の袈裟を着く、金光燦爛として四邊輝く)

唄。秘法を解けば。一坐はハッと。悉醒めたり。殿上見れば何時の際に。元の提婆となりたる歟と。訝しむ一坐。ぢろりと見下し。威儀殿かに太子に對ひ。

さめて顏を見合はす一坐を見下して、提婆、太子に目禮する。立ちたる儘にて。

提婆「殿下とは初めての對顏。」

太子「はッ。豫てより聞れ無き御尊名、落なが為ら承はり及ぶ。今日の對面、先以て重〻〻〻、して今日來臨ありしは。」

提婆「大法を說かんが爲に。」

太子「はッ。」

提婆「われ四天下を見廻はせ共、悟りし吾法を傳へんに足るべきもの、殿下の外に求む可らず、根機すでに熟せりと見て、臨りし吾。殿下、われ今御身に說かんとする法は、甚深微妙不可思議、世界開闢の創より、いまだ說かれぬ大秘密、しばし臣下を、遠ざけ給へ。」

太子「はッ。うりや者共、遠慮致せい。」

一同「は、はッ。」

一同引退る。庭樹の間にて小禽鳴く。提婆再び威儀を調へ。

提婆「いざ、いざ語らん。須らく心耳を澄まし、心を靜めて、相聽かれよ。見渡せば、ろれ宇宙は際涯なく、中に住へる有情非情、萬物また限量あらず、あに無邊の大光景にあらざるや。國は平和に、世は盛。民とみ榮ねて、兵强く、人智開けて文明の、春風四海に滿ち亘る、いやも賑やかな、樂しき斯世と見るは俗

眼！。』

太子驚く。提婆見すまし、また威儀を直しつ。

提婆『驚く莫れ、さゝ大王、天は地となり地は天となる、今やこの世は顚倒の、皆目見ねぬ盲族、無明長夜の闇てらす、松明あれど無いも同前。各々自ら聖となす、へゝ、聖揃の世の中に、誰か鵜の雌雄を知らうぞ。日月星辰、天に廻れど、晃耀天に局られて、下界は暗。此有様を大王には、さゝ何と見そなはして泰然自若の御拂、日月照さず、星辰隱れ、民に君なく、國に王なし。革命の軍起らんとして未だ起らざるは、その勢、既に起りたる時よりも凄じゝ。われ大王の心を鑑るに、智慧深きに似て、實は淺く、深宮殿裡の學問は、去年の暦に異らず。さるを大王何を慢じてこの太平！。はて、合點のゆかぬありさまやナ。たゞ其とも、將に大に破れんとするもの先づ大に怠する意か。いやさに非ず、／＼、疑き此世を明いと、御覽召さるゝ下方大王！。』

太子『いや、何と！。』

提婆『上下混亂、天地顚倒、拳はれても押込められても、何うで指を咬へて、グウとも宜はン骨無王！。』

太子『な、な、何と？』

提婆『何がさて、國を治みよう、民を安みようのと、思ふ料簡は露もたず、智慧不足な、考へ無し、いやモ誠に愍然な、古今稀なる恐大王！。イヤア、恐怒は敵、若氣の至り、貴臣を遠ざけしは、こゝを諛びず、諂はず、包まず匿さず、膝とも談合（四邊を窺ひて）かく遠ざけし上からは水不入。殿下の耻には成るまいがの。吾より見れば孫兒も同然、爺が物言ふと思ふて、眞身に聽かせ給へかし。今にして革命なさずば、爲すべき秋は、再び莫からん。御父頻婆娑羅王は、もはや老朽、言ふに足らず。普天の下、卒土の濱、何れか殿下の有ならざる。なれどもわれ、先王に對し奉り、左右の沙汰を爲すには非ず、この世闢けし初より、傳へ來りし國の例思ひ浮ぶに任せて一言、耳に入れたる許りぢやと、必ず曲げては取るまいぞよ、必ず曲げては、聽くまいぞよ。のう太子、獅子は生れて三日目に、底ひも知らぬ谷底へ、ろの兒を蹴落すものそうな。太子は獅子の兒ならずや。』

太子『ザ、。』

提婆『獅子の兒ならば何故にまた？。』

太子『さゝ。』

婆提『決斷如何に！。』

太子『さァ。』

婆提『承はらむ。』

太子『さゝ。』

婆提『獅子の兒ですら刻ね返へる。御身は其とも豚の子か。』

太子『サァ。』

婆提『鼠か猫か！。』

太子『サァ。』

婆提『サァ。』

太子『サァ。』

婆提『さゝ、返答いかに。へゝ、ゾ、、ハハ、、、。言ふた許りぢや、〳〵、必ず氣にはかけまいぞよッサ、恐恐は敵、若氣の至り。釋迦は壁なり、吾はまた、言はんと欲する所を言ひ、行はんづ思ふ所を行ふ沙門の提婆、後日に思合せたまはん。大王よ、釋迦は唯未來を說け共、われは此世の大事を語る。悟り顏なる釋迦文に、殿下もやはり、歸依なし給ふか？。』

太子『は、言ふにや及ぶ、釋迦はこの阿闍世、眞平でござる。』

婆提『イヤ其聞いて安心、イヤサ成らざる怪物ぢやと吾も思へど、殿下が斯く嫌はせたまふは、また何故に？。』

太子『何うやら虫の好かねわ、下間な頓珍奇だと、思ッて居るたァ御存じのねわれ天氣の釋迦文！。熱病を疾んだ後見てわな、ほゝけ面が、殘に鯛はッて、相成らぬッ。』

婆提『いやも、その如に頭ごなしに叩かれては、釋迦も洗足で裏口から、逃亡せず ば相成るまい。ぢやが、併し、阿闍世大王、渠は大愚と號し、今や自ら天下に獨れて、一切智人といふならずや。』

太子『たゝさ。』

婆提『一切智人といふからは、天地間の有りと有らゆる森羅萬象、皆悉く知りたりと、いふとならんが、のう大王。』

太子『いかにもサ。』

婆提『サァこの齟語を破らん爲、道理上より條理正して、我語らん！。』

太子『は。』

提婆『心を靜めて、相聽かれよ。』
太子『は、はッ。』

提婆、此處ぞと思ふ科よろしく、一段と威儀を正し、手まね身振などして、勢猛々しく辯じ立てる。

提婆『いざ、〳〵、聽かれよ。先第一にわれら知るべき事物は無量無邊、限量なし邊際あらず、而るに之をば知らんとする、われら人間の智慧に至つては、限量邊際のあるものならずや。正直、限量邊際がある。さゝ今限りある智慧を以て限量なき法を知るを得べき乎。いま現在、この閻浮提の陸の上、水中に住む有情でさへ、數へ盡せぬものならずや。さるのみかは、今この有情に男女あり、非男非女あり、在胎、孩童、少壯、衰老、苦樂、貧富と、微細に分くれば限りなく、過去や未來や、現在の、變化多端の心の影、是また數へ盡されんや。しかのみならず、諸々の、善惡の業といはるゝ其中にも、己に集んだる業、今集ぶ業、まさに集ばんとあり。まつた、その報に就ても其如く、已に受けたる報、今受けつゝある報、未だ受けざる報のと、サ、其から萬物の起伏生滅、この閻浮提の山ぢや、河ぢや、泉ぢや、池ぢや、草でごある、木でごある、森でごある、林でごある、ろの根、その

莖、枝、葉、花、果と段々に取り調べて數へなば、知るべき事物は邊際なし。さア、この、南閻浮提の如くに餘の三天下も其の如く、この四天下の如くに、三千大千世界も其の如くに、一切の世界も亦た然らん！。

いかに大王！。唯この世間の事物ですら、その數無量無邊にして知り難し

いかに況んや限量なき、この宇宙の萬物をや。この理によつて案る時は、この天地に一切智者なし。況や豚の尻尾にも、足らはぬ釋迦めが何を知らうぞ！、萬一まつた、渠ら窮してイヤ然に非ず、萬物限りなきが故に一切智人なきにはあらで、萬物限りなければこそ、之を知るの一切智人と申すもの生ずるのぢや。智慧先にあつて、その智慧から、知らるゝ事物生ずるにはあらで、知らるゝ事物先にあつて、之を知るの智慧のちに生ずるのぢや。この順序による時は、知らるゝ事物無量無邊の故に、之を知るの智慧、また無量無邊なり、無量無邊の智慧を以て無量無邊の法を知ると、何の咎か是あらん。且まつた、吾師（釋迦）の如きは其御智慧に大力あり、その知らんとする諸法に於て障碍なく、過く一切を知りたまへば、一切智人と申上ぐるも、妨げないと謂ふならんが。サ、大王、眉を濕して相聽かれよ。すりや成程、大なる智慧は大を知り、小なる智

慧は小を知る、無量の智慧は無量を知るは理の當然。なれども智慧と申すものは、恰もこの指の端、指自らを指す能はず、その劍、劍自らを斬ることならぬと一般。天地間の森羅萬象たとひ無限の事を知るとも、智慧その智慧を知ることならねば、一切智とは云ひ難し。若まッた、智慧を知る智慧別にあり、後の刹那の智慧を以て、前の刹那の智慧を知るといふならば、後の刹那の智慧なるものは、そのまた後の智慧にて知り、その又後の智慧なるものは、そのまッた、後の智慧にて知らんのみ。かくなる時は何時まで行く共、際限なからン。さすれば彼の、智慧なるものに無量の力あるならば、如何ぞ自ら知らざるべき？。既に自ら知らざれば、無量の力ありとは言へぬ、サヽ道理ならずや、いかに大王！。」

太子「いや成程、流石は五天に隱れなき大論師、かく理論上より、水も漏らさぬ理詰の退治。」

婆提「これには釋迦も。」

太子「必ず閉口致すであらん。」

婆提「先づ聽き給へ。われら知らんとする諸法は、今いふ如く無量無邊、今かりに百千萬億の智人を合同するも、尙ほ悉くは知り難し、何に況んや一人にて、之を知るとなるべき乎。是より見るも一人で、一切諸法を知るといふ事定んで莫く、一切智人定んで無し。若しかいら、左にあらず、一切の山河衆生非衆生を殘らず知る故、一切智人と言ふには非ず。但悉く、一切の經を知り居れば、此點より一切智人と名けしと、かいら窮して言ふならば、そうは言はさぬ、何故ならば、釋迦佛法の其中に、吠陀の經典を說かざるは是その證據。大風呂敷の釋迦文が、知ッて說かざる道理なし。知らざればこそケチをつけ、文句をつけて外道呼はり、ナント、片腹痛いではごアらぬか。それ吠陀の經典は、古より四吠陀羅經とて、四に分たれ限量ある、經文でさへ今の世に、蓋く能く之を知るもの、絕ねて一人も之れ有らず。況んや釋迦の大愚人、名利の慾に眼の眩んだ明盲に、ヘン、何が解ろかい！。

さヽ、大王これより一々、釋迦の狐の化の皮、いざ引剝いて性體を、顯はし呉れんづ、たゞ左樣ぢや。

まづ第一に、釋迦は未來の事を知らず、早い話が斯く申す、われ今茲にて一切智人を難ずべしとは夢にも知らぬ證據には、釋迦豫め何れの歲に、何の某と申するもの、何といふ處にて、斯々の事を以て一切智人を難ずる事、必ず有ら

んと說かざりしは、さァ何故？。彼奴もし悉く未來を知らば、何故また之を說かざりしや。さすれば是れまた明らかに、一切智人に非ずかし。

大王も既に知らるゝ如く、彼の旅遮婆羅門の女淫を以て弟子を迷はせ、釋迦を誘らんとなせしを知らず。彼奴もし之を知り居らば、諸の弟子に對ひて何故にまた、未來に是事あるべければ、氣を付け玉へと豫じめ、弟子には言はぬぞ？、說かざりしぞ？。

加之、かれ先つ頃、さる婆羅門の聚落に入込んで、乞食なせしが、與るゝ者なく空の鐵鉢重たげに、悄々落聚を背ショびれ、面膨らして出でたるは、これ卽ち魔の時には、諸人の心を轉ずると、ならぬ道理を知らざる故、かれ若し知らば魔の時に、何條婆羅門の村に入るべき。さすれば彼奴は、未來の事を知らざる也。まッた、昔に誓いた羅閱祇國、王舍とやら、サ、申する城の大王に、阿闍世王とサ、申する王？。この王釋迦を害せん爲め、國の寶の御庫を守る醉象をば、城中に放つた御事、サ、あらずや。かやつ之を知らざる故に、其城に入つたではごァらぬ乎。若豫め知り居らば、則ち城に入る可らず、さすれば是、未來の事を知らざるなり、未來の事を知らざれば、一切智人と爭で言はれン。

而已ならず、一切智人と世間から、言はるゝ程の釋迦文が、アノ、ソレ、惡涅達多婆羅門の招待受け、大勢の弟子を引連れ、遙々と、韋羅閣國なる達多が家まで行ンだは行ンだが肝心の、施主なる達多が後悔なし、來られて見れば、でも供養、食はせるにも事を換へた、馬麥をば彼奴に食せた珍談あり、渠豫め知り居らば、招待されて三月目に、馬麥をパクック迄に醜態を、演ずる要はなかるべし。

のみならず、渠釋迦文、須涅叉多羅を抱込んで、弟子になしたはよけれ共、このもの惡心堅牢にて、度し難く、化し難く、日數を經るに從つて、凡て佛語を信せざるのみかは、果は釋迦文をば、詈り居れりといふならずや。いかに大王。われ是迄に釋迦文が、未來を知らざる義を論せり。然らば、之より……。」

と、言ひかけて水を求む。太子、冷にたる酒を上る。提婆心地よげに數次か之を受け、飲んで、さて、徐ろに、がむしやらに縮れたる鬚髯（褐色の）を撫でつゝ。

提婆「いざ聽かれよ。」

（小禽また啼く）

提』かれ未來を知らざる如くに、現在の事また知らず、云何とならば渠成道し了ッて初めて法を說かんとするに、渠心の中にて思ふやうは、……イヤモ滑稽至極、我が得る所の法は甚深玄遠、微妙寂滅にして知り難し解し難し、たゞ智者之れを知らんのみ。われ世間の衆生を見るに、營々として唯だ性事に貪着す、若しわれ法を說かんに衆生解せずんば、徒らに疲れて苦まん。イヤ說くまいか、イヤ〳〵說かうか、然らば說かうか、イヤ〳〵說くまいかト、疑心を生じたる由、彼奴みづから白狀して居るならずや。然るにその時その國にて、已に煩惱を退治し、業障を離れたる者、已に八難を離れて、深法を聞くに堪ねたるものありしを知らず、是れ明らかに現在の事さへ知らぬ證據ならずや。それに又、間抜けた面で山を出でたる其折に、まづ我が利益をなさんもの、果して何れの處にあるかと、思案半ばに天に聲あり『尋ぬるものは今、波羅奈國鹿野苑の中に住す』と、言はれて氣の付く一切智人！。いやもう、御話しの外でござるテ。

さるを何ぞや、かれ釋迦文。やッとの事にて招待受け、鼻高々と法を說いたはよけれども、後は頼んで呉れる人が無く、其でも自分が拙とは思はず、矢ッ張聽衆が惡いのぢやと、他人に垢を塗り付けて、オホン、此後は誰にか說くべき。イヤ、あるわい。われ其昔、城を遁れて山に入りたる其砌、吾師と頼んだ鬱多羅弗、この仙人こそは、その器量利根に在せば、開悟せんこと易すかるべしと、死んで居らざる仙人をば、山へ遙々訪ね入る。この時天に聲あつて『大仙昨夜命終す』と、言はれて狽へ、アンケラカンと立ち還へる、譯にも行かねば此次は元の師匠の阿羅邏仙人、かれを度せんと嶺から嶺、身の丈餘る草分けて、谿から谿へ、七日已前に死んだとは、御存じのねゝ莫迦如來！、骨折り損の、疲勞儲けた、一切智人！。

咄！、世界中の大虛言者！。知りもせざるを知り顏に、他心徹鑑の天眼ありと吐く後から諸々の、弟子に、對ふて『コリヤ、汝等は、其處にて、何を語れる』と、分らねばこそ尋くのぢやト、人の思はくも氣が付かず、乍ち化が露はれても、蛙の面に尿とやら、洒々然として高慢話いつぞや、弟の阿難に向ふて、何を吐かすかと、聞て居りや『唯だ我一人第一にして、比なく與に等しきもの無し』と自ら讃ひる、高慢面の其の片腹痛さ、比丘や尼、優婆塞、優婆夷、羅門をば、此の修羅の人、五耶の法を成就す、無信、無慚、無愧、寡聞、懈怠、少念、薄知、イヤモ聞くに堪ねざる罵詈

惡口。自ら讃めて他を貶るは、俗人ですら尙ほ恥とする。況んや、ド偉らい一切智人！。かれ釋迦文、いかに巧みに僞るとも、暗ましは難きは、提婆の眼力！。』

太子『イヤ、逐一理に照し、事實に徵する論難攻擊！。』

婆提『いかに辯者の釋迦たりとも、理の下は潛られぬ。』

太子『いかにも〳〵！。われ其むかし五百の靑年打從へ、狩の牧場の歸途に、彼が口から出放題、無量壽經とやらを聽いては見たが、いやも、抱腹絕倒！、小兒騙しの飴細工、採るに足らざる愚說で、御座るッさ。』

婆提『あアあ、五天の中廣し、と雖、談るに足るは大王一人！。』

太子『はゝッ。』

婆提『いま世を擧げて皆濁る、その正中に淸めるは大王と我二人！。』

太子『はゝッ。』

婆提『知るは知らぬの初めにて、知らぬは知るの初ならずや。』

太子『御意に……。』

婆提『われら正直、何事をも、知る能はずといふ事が、知れさへすりやア眞の證！また此外に證はねゝ！。然るを何ぞや渠釋迦文、悟り顏なる似悟、一切智人と自ら號する耿法螺の親玉！。とは親知らねゝ五天の愚人。猫も杓子も合掌讃歎、供養尊敬！、チエッ、サ、何と、馬鹿らしいではごアらぬかャ。斯樣なものを供養して、手を合せて拜むのなら、尻穴へ扇子を突立ッて、拜む方が增でごあるッ、さるを何ぞや御父王、頻婆娑羅大王にはつい此頃も金銀七寶、妙衣上服百味の菓食、車の數が五百蚕、妙香妙花、奏づる伎樂、音も遙かに百千萬人、前後應ずる讃美の歌、左右を取卷く行列の、山へ練り込む壯觀を、見たる提婆が、イヤサ美々しさ。腹立たしさ。いかに時世と云ひ乍ら、世は斯く迄に成果てしかと、悲憤の涙に！、暫時は、昏れて……。』

太子『ヤア、言ふにや及ぶ弟子また、父にも越ねて、今度は一番、いとき、らびやかに大々供養、必らず吾が師に、致し申さん！。』

婆提『は、はッ。』

提婆、たのれを忘れて平伏して好意を謝する。この時、阿闍世、大盃を擧げつゝ、大音にて。

太子『やをれ者共！。』

（樂屋の方にて）

同『はッ、はッ。』
提婆『提婆に酌を。』
太子『之は失禮。』
提婆、酒を注がんとする時、樂屋の方にて、
同『ワッハッハ、ウッフッフ、ハッハッハ、ハ、ハ、ハ。』
二人、眼と眼、顏と顏、思ひ思ひの表情あッてたゝ驚く處にて幕。

第七齣

この姿

登場人物
常不輕菩薩
童子三人
提婆
增上慢の比丘五名

※　※　※　※

王舍城中はてしなき芭蕉林の景、正面は芭蕉の背畵にて、左右處々に、幹太く、葉大なる同樹、青々と繁る。遙かに小さく朱塗の城門を見せ、下は一面の砂地にて、今や强き太陽の光線白く、眩く、其の上を、ぢり〳〵と照り付ける日の眞盛。

提婆、眼目して中央に趺坐し、石の像の如くに動かず。

蟬の聲にて明く。

唄。無殘やな。萬乘の御家に。降誕なれば一天の。にん主にてはしますっ。金

枝玉葉の御身にて。故郷あとに他國の空。五十年來のあめ風に擲かれても泣かなんだ。この鐵石の胸三寸。忘じかねたる戀の仇。其さへ今は夢ぞとよ。思ひ廻せば此年月。老の涙に只だ濡るゝ。衣の御袖、翻へす。風は冷々。身は慄々。思はず、はッと立歸へる。わが身を看れば此はいかに。天上ならで王舍城。

蟬の聲止む。

この時、目を瞬き、たゞ呆れて茫然と眴す中に、駭いて、提婆、狂亂の如くなる。

唄。こゝは王城の東門にて、廣々つゞく芭蕉の林。

提婆、踊り上り〳〵地駄太踏んで無念の思ひ入れ深く、聲を荒らげ。

（蟬、遽く鳴く）

提婆『ぶるゝ、訝しやなア。われ最前、阿闍世太子に頼まれた、花は此世の花ならず所望をされた曼陀羅華！。この提婆が手に入れて、示せたとなら阿闍世も喜ぶ、名も揚がる、重き供養も存分にと、豫て修習ねた通力にて、娑婆を去ること八萬由旬、身を躍らして三十三天、登つて見れば銀の、山に續いた花盛り。谷は

珊瑚の林にて、郷へ落ちて、く水晶の、溶けて流るゝ小川さへ、隱れて見へぬ花の國、瑠璃の樓閣空高く、崩折れかゝる黃金の雲、天の宮居もこの花の、底に在るかと踏む脚の、下は眞珠の砂殿、流石のわれも此毛穴、穢い體が羞かしく、心もたづ〳〵、氣も浮々、テント用事も何も角も、忘じ果てたる其處へ、ばつたり出遭つた二人の天女。『やア忘れたワ、吾來りしは此花を、探らんづ爲めの昇天なるを』と、心の中の覺道を、覺り居ッたか双共に、提婆に向ふて！去れと云ふ云ふた！、云ふた！、よく吐いた！、下界に居らば一打にと、思つたが短氣は損氣。勝つて負を取らうより、負けて勝を取るが分別、へいこらしても持つて歸るが肝心と、『こは怪しからぬ仰かな、某は提婆と申する下界のもの、國王より僅か一枝、所望を受けて遙々と、無心に參つた他化天の、魔王に此由二天より御取次の儀、平に願ひなし奉る』と、下げた頭を擧げぬ間に影も形も無ね。ヤイ天女！、畜生！、奴等の世話にならず共折取る手は丁と二本あらい！。づる〳〵づる〳〵と、妙なものを曳きづりあがッて、可い氣になりあがッて、何んだ、べらン〳〵と音樂師の出來損ちやあるめねし、ふてくされた面な、すべた女郎の痴の皮めが！。見ろッ。と言ふなり花に手を、この提婆が掛けるナリ、通力失

せて頭顛倒！。やッぱり此處は王舍城？はて、心得ぬ、事共よなァ。』

蟬の聲、近づきて、喇ける如く、次第にやかましく、高くなる。

提婆、自ら喇笑つて。

婆提『ウフ、ハ、、、蟬までが此提婆を阿呆にしやがる。煩さい！。喧しい！。ねゝ

倘吼ねるか！、うぬこの羽虫！。』

と、提婆、砂を掴んで、樹上目懸けて投付ける。

蟬群亂飛、益々高く鳴く。

婆提『默れッ、默れッ。』

と頻りに投付ける、蟬益々鳴く。

提婆、打案じて大喝。

婆提『わッ。』

蟬止めず。

婆提『わッ、わッ。』

と耳を抑ねて踊り上り〳〵、口惜しげに。

婆提『ねゝ餓鬼ッ、わッ、わッ。』

此時、下手より蟬捉の小兒三人、各自紙袋を提げ、竿を持つて出て來り、提婆を見て。

一兒『小父やん、蟬を捉るのか？。』

二兒『取つて呉んな。』

三兒『私にも。』

婆提『ねゝ和郎共あ。』

と顧りみて、他愛なく莞爾とする。

一兒『蟬とるんだ。』

二兒『私なんざあ、斯樣に捉つて居らァ。』

三兒『私もあるせ。』

婆提『うゝう、そうか、何れ何れ。』

と袋の口を覗く。

二兒『縞と見な。』

一兒『逃すと擲るせ。』

婆提『ねゝ好々。』

と袋を開けば蟬飛び去る。こゝに、小兒、提婆に揶揄る。逃げ廻る追ひ廻す。（此時遙かに人聲聞ゆ）

婆『やア勘辨だ、勘辨だ、謝つた、その代りこの小父が、澤山と提つてやる程に、まあ許せ。アヽ、敵はんヽ。』

と四方八方逃廻はり、態と擬まりて散々に打たれる。

提『あイた、ヽ。もう許せ。降參々々、あ、これさ。其代りこの小父が、高い處の蟬を婆『あイた、ヽ。』

は、百匹でも萬匹でも、根こそげ獲つて、サヽ、やるわいノ。』

三兒『やハい。』

二兒『爺さん、降參だと。』

提『いや降參々々。』

婆『いや降參々々。』

一兒『獲つて返へせ！。』

提『いや獲るヽ。』

婆『いや獲るヽ。』

一兒『捕れるといふせ。やハい、可笑ちいな。』

二兒『また砂を投げるんか？。』

三兒『怒號ると悉な蟬が逃げちまわア。』

提『いや逃さぬ、どれヽ其竿を。』

と小兒から竿を借りて此樹彼樹と蟬を指し乍ら、小兒と俱に葉蔭へ這入る。

こゝへ上手より、忽に法花の會下を中途にて退散せる、增上慢の僧五人、五色の袈裟に、好みの錫杖といふ立裝にていづ。（滿身黑く、眼のみ光る。）

甲僧『何と各々、此林は佳い處では御座らぬか。風は通る、日蔭はたつぷり、斯く微々と南から、吹かるゝ心地は一刻千金、チト休らはふでは御座らぬか。』

乙僧『いやサ其儀、いかにも同意。』

丙僧『然らば此處にて。』

丁戊『休息なさん。』

一同よき處に坐す。

遙かに蟬の聲。

甲僧、折しも芭蕉の葉の動くに目を着け、したり顏にて。

甲僧『あれ見玉へ、何ンと是は妙不思議！。彼處なる芭蕉は自然天然、われらの爲

めに圖扇の役目、致いて居るでは御座らぬか。』

乙『ホ、ウ成程、々々。』

甲『これ孫てより貴僧達とも、曾て論ずる萬物同體、賴みもせざるをアレ彼の通身共を煽いで居て、奥りやるは、はて、感心なもので御座るサ。さすれば天地は萬物一體、平等なりと主張する、身共を捉ヘて邪見ぢやと、思ふる樣な釋迦氏の、大邪見の法華の演說、イヤモ聽かれたものでは御座らぬ。』

乙『いやさ、其事で御座るテ。釋迦氏も彼の樣に、慢心されては鼻向けが、テント成るものでは御座らぬ。はッは。』

丙『イヤ、其はそうと、御邊には、彼の彌勒と文殊の問答を、何と聽きやッたかサ、身共は何うやら狂言でも、見て居る樣な氣が致し、馬鹿々々しいにも程のあつた、ものでは何ンと御座らぬか。』

丁『ありやァ狂言に極ッちよるサ。釋迦氏も彼樣な事をしちよらんと善いのぢやけれど、何うも、困つたもので御座る。』

戊『いや困るにも困らんにも、說くならさッさと說いて了つて、何にも聽衆にやき〳〵させるにも當るまいでは御座らぬか。但しは何の樣な、珍らしい事

を說くかは存せざれども、眞實衆生が可愛くば、なにも說くのを恩にかけてサ、。勿體振らずに話すが、却つて釋迦氏の爲で御座らうにサ。では御座らぬか？。』

甲『れいの。御邊の言ふ通り、あの嫌に勿體振るのが、甚だよくないで御座ると身共の師匠も下山の折に、身共にも話したとで御座るがサ。大體、今說く法華經なるものは、釋迦氏が其こそ一世一代、後にも前にも滅多にない大演說。みなも行くに依つて吾にも往けと、言はれて行ンで、ずらりと先づ、見渡す處、獸されたは、悉僧ばかりと思ひの外、靈鷲の嶺は人で一杯、いやモ雲霞の如く、歷々も中には見ゆる其前で、奈何なる大事を說く事かと、待てど暮せど默然としして澄し込んだる釋迦氏が、隱せど著き高慢の鼻蠢かした彼の姿が目に著いて、思ひ出いては、ぷッ、可笑しふて〳〵いやもこの腹が綻るで御座るテ。』

乙『それに何んでは御座らぬ乎。うゝ、あのソレ天狗の彌勒が又ィヤに、氣取つてからに尊高くョ、文殊に尋ねた處抔はよい圖だトは申するものゝ、衆生を彼丈にはめるとが出來たなら、嘸ぞ心地のよい事でがなあろト、思はず此舌が、ペロリと出張、したで御座る。アッハ〳〵。』

僧丙『そこで文殊が長話。』
僧丁『氣取が過ぎてか聲が低音で、何言ッちよるか。』
僧戊『身共はまた一寢入したで御座るテ。』
僧丁『そりや又。』
僧丙『住い處へ氣が付かれた。』
僧乙『事で御座るノ。アッハ。』
僧甲『イヤサ、惣體物といふ物は、眞面目が過ぎると、得て滑稽になるので御座るノ。釋迦氏のは、眞面目が過ぎて滑稽になるのでは御座らぬ、かれは眞面目に滑稽を演ずる者で御座るサ。その證據には比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、五千人といふものが、座を拂つて一同時に、向に揃はず中途から、エッヘ、ウッフ、と腹を抱へて我等初め、退散なしたでは御座らぬか。』
僧丙『左樣、左樣、われらも御邊の言ふ如く、遙々山へ登ッたのは、何にも釋迦氏の滑稽狂言、見に行ンだのでは更々御座らぬ。眞實、天地間の本音を吐いた、眞面目なる大演說ぢやらうとは思の外。』
僧丁『舍利弗が、說て下され、說て下されと、彼の樣に、三度請ふたが三度迄。』

（釋迦の口吻を模して、いと悄さげに）
僧丁『（止、止、說く可らず。止、止、說く可らず）いやも腹も立つ！可笑しくもなる！。』
僧戊『アッハ。』
僧丁『いや戲談では御座らぬ、格別その身共は恐味にて、訥辯だにより……。』
僧乙『アッハ。』
僧丁『いや、眞實で御座る。だによつてその身共、釋迦氏の口眞似なりとも、よッく覺ねて、訥辯ゆへ、居たで御座るテ。ヒ、、フ、、。』
此時甲僧立ち上り、仰いで眩しそうに日脚を眺める。
僧甲『いや、兎角する間も日が傾むく。また横日になると、歩行に困難、殊に王城の中は地獄の釜底。淺ぎが惡う相ひ成らぬ內、いざ、出立と、致さうでは御座らぬか。』
一同『ィヤ奈何にも。』
と一同立ち懸る。
芭蕉の陰にて蟬の聲。
僧乙『それはそうと今日はまた、非常なる暑さで御座るノ。』

丙僧『されば御座る。が併し、この日蔭にて吻と一息。』

丁僧『致して見れば。』

戊僧『蘇生も同前。』

甲僧『ナント是より路を更へて、彼の毘陀藍の師匠の許にて、今朝から始ッて居ると人から聞いた、法華反對の大演說、其れへ臨席、いかゞで御座る。』

乙僧『それも宜からう。』

丙僧『イヤ面白し。』

戊僧『愉快！。』

丁僧『贊成！。』

甲僧『先々御邊。』

乙僧『いや先々御邊より。』

甲僧『イヤサ先々。』

乙僧『然らば御邊。』

丙僧『イヤ先づ貴殿。』

乙僧『いやサ。』

丙僧『然らば貴殿。』

丁僧『イヤ先々。』

と卑下慢の僧、互ひに讓り合ふ、トゞ甲僧先導と定まり、乙丙丁戊の順にて花道へ行き懸る。

唄。さらば御免と打ち連れ立つ。慢比丘の足の裏。砂地は燒けて、風燕る。市街を指して去んとする。跡を見送り窺ひよる。提婆は聲を荒らげたまひ。

この時、正面稍や上手の芭蕉樹の蔭より、五比丘の後を見送りつゝ提婆現はれ、思案の科あッて、聲破鐘の如く。

提婆『アイヤ、物はらく。』

五僧惘いて回顧、提婆はッたと睨ンで。

提婆『うりや！、キリキリ此處へ、戻ーらーれーよ。』

衆僧なす所を知らず、戰慄して畏縮する中に、甲僧のみ獨り、さらに慓いた風なく、提婆を眼下に見て、嘲笑を浴へつゝ近づく。

甲僧『ヤア〳〵然う言はるゝ御邊は、一體何物なるかは愚僧存せざれど、在家は

在家の作法、また出家には出家の禮儀と申するもの有之は、御邊と雖も、定んで承知の事ならん。さるを何ぞや、その禮儀も無く、その作法もなく、この天下の往來にて、奴隸の如くに吾儕を呼ぶは何事ぞ！。貴公は、見れば、出家では御座らぬか。貴樣は、出家の分際にて、今のは、ありや、何んだ！。コレ貴樣は出家では有るまい！。第一出家でも無いものが、其出裝は何だ！。今日在家たるものは、國法上、出家を敬はねば相成らん！。さア、出家ならば今の非法。言ひ疎く言葉は、有るまいがヨ。』

婆提『恐僧。』

僧甲『ハヽ、愚僧にて恐れ入る、此許が恐僧なら、其許は大恐僧！。こんなものには、たとひ此舌が爛れる迄に、幾ら說いても、論しても、百日の說法屁一つ！。糞の役にも立たぬ奴に……。』

婆提『默れ……。よくべラ〳〵べラ〳〵と、野放縱に喋舌りャがるッ、この章魚坊主！。貴樣は一體、誰の弟子だ。』

僧甲『誰の弟子で有らうと大きに御世話サ。此許は天下晴れての沙門だ！。氣の毒乍ら、貴樣の樣な、浩りではないワ、大入道。』

婆提『だッ默れ。』

僧甲『ハヽ、激したり、この炎天、物は言ふべし、酒は買ふ可し、ヤヽ、落付けて而る後に。何にも和合海ぢや。互ひに胸襟を開いて、我他彼此の見を滅却して、而る後に。のう、物は相談、トックリと又、言ひもし樣し、聞きもし樣では御座らぬ乎』

婆提『う、う、奴！。承はるか……。』

僧甲『いかにもサ。何にも天地は萬物同體で御座る。之は眞理ぢやな。然るに、この眞理を辨へざる者は、我ぢや、人ぢや、彼ぢや、此ぢやト差別を立つるに依つて色々と、ソレ騷動が持ち上るぢや。いま平等の見地に立つて、宇宙を達觀するならば、怨親平等眞に光明無限の大海でござる。何にも御互に、敵の末では有るまいし、有無相通、萬物相扶けて、相害するとなく、旅は道伴、世は情とかく柳は風次第、千成ほゝづきャ成り放題、わたしと貴方は夫婦です……トコトットコトットと云つた樣な調子に、世の中を無事に渡るが、悟道の奥義と申するもので御座る。それはそうと、この暑いのに御用トあるは、はて、何事で御座るノ、願くば、その要領丈けにて……。』

婆提『いざ。その要領を知る前に、我はそも何人なるかを心得設け。』

甲僧『はてな。愚僧はの、性來近眼にて、何うも……。』

と云ひながら、熟々見て、ハッと驚く色を隠し、何に喰はぬ面色にて。

甲僧『ホ、ウ、御邊は、提婆殿ヨな。是は好い處で、た目に懸つた。はテ、御用の趣きとは？。』

婆提『なんと貴樣ア、われの弟子になる氣は無いか。』

甲僧『ハ、、、是はまた近頃珍無類な談判で御座るナ。たとひ提婆が庖丁でも、味に二重はねい筈で御座るが、それでも、成ッた曉にやア、何んぞ味な事でも有るもので御座るかノ。なンと各位、左樣では御座らぬか？。』

と背後に畏縮する他の四僧を顧りみて言ふ。皆々『コレサ〳〵』と手眞似で制する。

婆提『有るとも〳〵、第一金銀に不足なく、肉食妻帶は身の勝手。』

甲僧『アイヤ、提婆殿チト、嗜み召されい、身共の面前にて、斯くなる事を不遠慮にも申すは、チト過言ならずや。』

婆提『コレサ萬物同體！。貴樣には、過言とな。』

甲僧『いや、申すにも事を換へた、奇怪千萬！。』

婆提『ハ、、、何にも奇怪千萬な事は有るまい、そこが有るから身が最前、身の勝手ぢやト申したでは無いかッ。』

甲僧『いや、勝手が床間で有らう共、眼目で御座る。』

婆提『何うせ眼目たア知れてるが、滿更捨てたものでも有るまい。』

甲僧『イヤ、イヤ、無益でござる！。』

婆提『左樣なら貴樣ア何うすれば、汝はよいのか、語れ、語れ。』

甲僧『言はずと知れた事で御座るサ。御邊は無暗と身共に向ふて、弟子になれよト申さるゝが、大體御邊が授けんとする、教理なるものは何で御座るナ。』

婆提『ハ、、教理か。教理といふのは、これコウ！。』

と拳を固めてグワンと一打、僧鞠の如くに飛躍三回、地に仆れて死す。他の四僧之を見て震慄し、皆蒼くなる。提婆、死僧に一瞥、凄然と嘲笑ッて。

婆提『うりや、貴樣達、辭退致すか、弟子になるか。』

四僧、五體震へて齒の根も合はず地に平伏して。

一同『ば、ば、はァい。き、ゝ、屹度、で、ゝ、弟子に、な、なりまする。』

婆『相違ないか！。』

と進み寄る、四個身を縮めて、ただ繊かに。

一同『はゝ、はアい。』

婆『忘るゝな。うりや、者共、この提婆の、面を確かに覚ねてたけ！。』

一同『はッ、はアい。』

婆『他言致すな。』

一同『はッ、あい。』

婆『若し背かば此奴の通り、ねゝかっ』

一同『はッ、あい。』

婆『然らば許す、其代り、この虫毛を片附けよ。』

一同『はッ、アい。』

婆『何んぢや、その返詞！。腰抜けめら！。キリ〳〵運ぬか！。』

一同『はッ、アい。』

と、ガタ〳〵慄へ〳〵、抜けた力を絞り〳〵、死骸を下手へ運び去る跡にて提婆は、憮然として長大息。

婆『ねゝ、何奴も、此奴も、真人間な、是ぞといふて頼み力に、なるもなア一匹もありやアしねね。弟子になる奴、なる奴が、揃ひも揃ッて、ねッ、あの始末！、やッぱり、こりやア、悪事は成就せざるに定つた、因縁ぢやョなア。其れにつけても羨ましいは、同じ血道を分けた釋迦文、いつのまに作ッたか、数多の大衆、よき弟子有ッた彼奴は幸ひ、わりや不過、いざ、いざ、是より慈嶺に登り、きやつの大衆を奪はん爲、一か撥かの手詰の懸合！。若し素直に渡さばよし、萬一酢の昆布のと、吾に大衆を渡さゞる其時は、ねゝ、斯うなるからはやぶれかぶれ！！。助けてねが、慈悲がねねや。掴み殺すか撲り殺すか！。たゝ、左様ぢや。』

此時、上手より常不輕菩薩、乞食道心の姿にて出づ。提婆之れと行き違ひ、やり過ごし、襟首をムヅと引捉ふ。

呼。左様ぢやと詐り盤石の。拳を打振り腕試し。山を目懸けて走らんづ。目先を過る一個の沙門。是ぞ世に御名も高き常不輕菩薩にて在ます。

提婆は態と道り過し。襟首ムンヅと引ッ捉へ。

婆『うりや、待ッた。』

常『……。』

一天俄かに黑く、雷鳴凄く、大驟雨となる。

提婆『汝ア、釋迦の弟子だな？。うりや吐せ！。物を言へ！。』

隨菩『……。』

提婆『うぬ、言はぬか！。』

と云ひ樣、ひき倒し、提婆足にて踏む、蹴る。（既に一身を自然の大光景中に委托せる沙門、啞の如し。）

提婆『うりや、痛ねか。苦しいか。フ、頓ては吾の世となるハ命が惜しくば降參なし、釋迦と縁切り、この提婆が、弟子となるか、サ、くたばるか！。』

と、提婆、足にてドンと蹴飛ばす沙門轉ぶ、其の頭をムンズと踏まへて。

提婆『ヤイ、返事の無ねは、此處で世話に成りてねかッ。ヤイ、道心！。』

と蹂躙る。沙門の面上血流る。雨中の沙門、苦しき息の下より聲も細々にて。

隨菩『命は更々惜しからず。阿兒菩提の道一つ、退轉なすが悲しさに！。』

提婆『悲しいことが有るものか。菩提の爲に死るよりは、黑鯛でもウンと喰ッて

長命する、法が提婆の眞實敎。うりや、この提婆が見込んだ精神、いや實に感心なものぢや、弟子になれ、弟子になれよ、……うりや、是程に言ふてもウンともスンとも返詞の無ねは、ヤイ、覺悟！。』

隨菩『……。』

降雨猛勢となる。

提婆『うぬ頭を、めり〳〵、踏み……破る……ぞ。』

と今や頭に、グッと力を入れんとする刹那、急に氣を更へ、足を曳く（小雨となる）

提婆『汝ア見上げた其心底、流石はイヤサ俺ッ葉の、露に止まッた蟲ら同前、殺したからが巾にも成るまい、命冥加な、ねゝ、畜生！。助けてやるは。その代り。受けた御恩を忘るゝなア。にゝ、々々、其はそうと雨も霽れた。涼しい中に、どりや左樣ぢや。』

提婆、上手へ這入る。この時雨霽れて、夕燒の色、樹間に迫り、光景次第に變じゆく。四邊は麗しき雨後の景。遠雷かすかに聞ね。跡は森として蟬の聲二ッ三ッ。

こゝに沙門むッくと起き上り、鮮血流がるゝ面を擧げて、苦痛を忍んで打惱む。樣と仆れては起上る、トゞ屹と遙かに、靈鷲の峯を伏し拜みつ。

『世尊！。愚かなる私は、師の道の爲に、斯る忠難に遇ひ、私如きものが、師の爲に、この辱と辱とを受け得ましたる幸ひを、私は謝しまする！。是といふも、私の道念の未熟でありまするが爲に、この處まで誘はれて、師の試みを受けましたので御座ります。

けれ共私は、師の御冥助を蒙りまして、嶮しい路も惑はずに、通りました！。どうぞ、唯今私に迫害を加へましたる彼をも、私と同じ樣に、お導き下さいまして、證の彼岸に到りまするやう、お願を致しまする！。

あゝ道華上の摩尼！。永遠に活きたまふ光の使者！。

父よ、御覽遊ばして居りまする如く、子は父の御許へ還へるのであります。私の友は、師よ、師の御力なしには、父の慈懷に返へるとの能はざるもので御座りますれば、伏乞。一層憐愍を垂れ給はんことを、私より御願いいたしまする。

で御座りまする!!。』

四邊は夕燒燃ゆるが如く、白露燦然として、次第に紅くなる。

この時靈鷲山頂、遙かに響く鐘聲にて道具廻る。

（二）幽閉

登場人物

御父頻婆婆羅大王
阿闍世太子
雨行大臣
提婆
其他諸臣

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

阿闍世太子寢殿の場、凡て丹塗の造にて、華麗を極む。中に太子、大臣雨行と對坐し、階の下には諸臣列坐の處。

こゝへ提婆悄然として入り來り、太子殿上にて、悲しく請ずる體に て明く。

太子『ホゝウ聖人には、能くこそは御入來まづ、殿上へ。』

提婆『……。』

太子『サ、先々。』

提婆『……。』

太子『さゝ此處へ。』

提婆『然らば御免！。』

太子『はッ。』

と太子雨行平伏する間に、提婆、思案に沈みつゝ、設けの座に着く。

太子『今日は、殿に居てさへ堪ね難き炎暑の中、能くこそ御來臨。』

雨行『唯今も御上とも、恐れ乍ら聖人の御噂を致したる折も折。』

太子『噂をすれば影とやら。』

雨行『先々御ゆるりと。』

階下の臣に。

雨行『こりや、酒肴を持て。』

臣『は、はッ。』

皆々慌み下手へ去る。（この間笛の音）

太子『いや併しそれはそうと一昨日、身が折入つて懇望相致したる、彼の曼陀羅の花は？。』